



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』 訳注 (10)

真下, 裕之(監修・訳注)
二宮, 文子(訳注)
和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 49:57-98

(Issue Date)

2022

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013086>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013086>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』訳注 (10)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

[AA: I, 118]

武具の館¹の規則

内府の繁栄²は武具の館から発し、兵の装備はそれによって整い、世界の隆盛はそれに帰する。それゆえ等級をよく知る世界の主人たる御方は大いに御心を傾け、武具の館の整備に深い洞察を示される。新たないくつもの企画が顔を焔めかせ、業務の質が向上したのである。【例えば】御前において、ある鎧が銃(bundūq³)の標的とされたが、凹みの痕は見られなかったので、これが諸軍に

* 青山学院大学文学部教授

** 岡山大学学術研究院社会文化科学学域准教授

1 qūr-ḥānah. 元来「矢筒」を意味する qūr の語義が武器全般に広がったことについては [Doerfer: I, 427-428]。(M)

2 ḥānah ābādī. 本書の冒頭に見られる manzil ābādī 「御所の繁栄」[AA (Jtr.) (1) : 80, n. 9] とほぼ同義と考えられる。「兵の装備」sipah-ārāī、「世界の隆盛」ma'mūrī-i ḡhān とともに、それぞれ帝国の宮廷、軍事、国土に対応しており、これは本書を構成する三つの区分に対応する。(M)

3 Khan によれば、15世紀初めにオスマン朝に導入されたハンドガンないし“arquebus”は、一般にイスラーム諸邦やインドにおいて「tufang あるいは tufak (本来 crossbow を意味する語)、および banduq (shots を意味するアラビア語)」と呼ばれた。そして以後4世紀の間、火縄式、ホイールロック式、あるいはフリントロック/火打ち石式のあ

行き渡るよう常に備えられている。

市場で取引される武具⁴については、王冠の主の御明察により価格が決まる⁵。

御用の武具については、名前と等級⁶が定められる。30振の太刀⁷が御用のもの(ḥāṣṣah)とされ、月ごとに一揃いが王朝の御寝所に届けられる⁸。前月の一揃いは送り出されて、表(おもて)の僕たちが順番に片付ける。その他に40振が用意され、それらはクータル(kūtal⁹)と名付けられている。御用のものから消費され、12振になると、このクータルのなかから補充される。12振が一束(yak bandī)であり、1週間経つと順番が1つずつ移る¹⁰。ジャムダル(ḡamdhar¹¹)とカ

らゆる種類のヨーロッパのハンドガンが無差別に“tufang”ないし“banduq”と呼ばれたという [Khan 2004: 129]。Akbar時代のbundūqについては、[AA: I, 125-127] (本訳注 83-86頁) に詳述。(W)

4 bāzargāni. 行軍中の君主の陣営において各種の工房とともに「市場」bāzārが設営されたことは、本書の古写本に掲載された陣営の模式図にみえるし [AA (Jtr.) (3): 126-127]、「市場」での軍需物資の販売についてはBernierが伝えているが [Bernier: 379-380; Bernier (Jtr.): 331-332]、武具の取引については詳らかでない。(M)

5 価格については、後出の表で言及されている。(W)

6 この箇所および後出の「等級(pāyah)」が何を意味するかは判然としないが、本文の内容から、「御用のもの(ḥāṣṣah)」と、予備の「クータル」を指すか。(W)

7 šamšīrの図像資料と文献資料が符合する例としては、1561年5月、AkbarがMālwah地方への遠征からĀgrahへの帰途、Narwar城砦近くで進路上に現れた虎をAkbarがšamšīrの一撃で仕留めた記事 [AN: II, 144] に対応する、Akbar Nāmah写本(Akbar時代に制作)の挿絵 (Victoria & Albert Museum, IS.2:17-1896) である。この図像に従えば、šamšīrは湾曲した片刃の長刀であり、腰に帯びた鞆に収められ、片手分の柄を有する。(M)

8 この文をBlochmannは、“Thus there are thirty swords (khāṣa swords), one of which is daily sent to His Majesty’s sleeping apartments.”と訳しており、1) 30振あるḥāṣṣahの太刀から「1本」が、2) 「1日ごとに」届けられると解している [AA (Etr.): I, 116]。しかし本訳注では、1) については、ḥāṣṣahの太刀は30振で「一揃い」と扱われると解し、2) については、底本および参照した三写本でいずれもbi-har māhiとあることから、「月ごとに」と訳した [AA Ms. A: 51r; AA Ms. B: 55v; AA Ms. C: 45r]。(W)

9 モンゴル語で換え馬、予備の馬を意味するkötālに由来する [Doerfer 1963-1975: I, 459]。ペルシア語ではkūtalとも言い、君主の前に行く鞍付きの馬、「伴走馬 (led horse)」を意味する [Anwarī 1381 Sh; kūtal; Steingass 1892: 1058b]。(W)

本書で後出する「事績記録官 wāqī’ah-nawisの規則」の記事では、七日で一巡する輪番の当番二名の一方が補欠要員であり、これが「当代の言葉ではkūtalと呼ばれて」いたことが記されている [AA: I, 192]。(M)

10 Blochmannはこの部分を：“There are also twelve Yakbandi (?), the turn of every one of which recurs after one week.”と訳す一方で、yakbandiという語が辞書になく、訳の正確さに疑問があると述べている [AA (Etr.): I, 116]。(W)

11 Irvine, Pantに従えば、ḡamdharは両刃の短剣であり、刀身の支持材に取り付けられ

ブワー (*khapwah*¹²) は40振ずつ、いずれも1週間ごとに一揃いが前のものの代わりにもたらされる。それぞれについて30振のクータルがあり、【数が減ると】前述のようにしてそのクータルから満たされる。また8本の小刀 (*kārd*¹³) と20本ずつある槍 (*nizah*¹⁴) とバルチャ槍 (*barčha*¹⁵) は1か月ごとに一揃いが使われ

た二本の平行する棒材と、その間に固定された一本ないし二本のグリップとで柄を構成する [Irvine 1903: 86; Pant 1980: 162-173]。 *Bābur Nāmāh* には *ḡamdharah* という語形であられ、日本語訳では「長めの短剣」、英語訳では “broad dagger” と訳されている [BN: 478; BN (Jtr.): 475; BN (Etr.): 528]。 (M)

Burhān-i Qāṭi' では *ḡamdar* としてあられ、「ヒンドウスターンで *katār*、韻律によつては *qaṭār* と言われる武器 (*silāhi*)」とされ、カターラー (注33) と類似の短剣の一種であることが示唆される。また「ヒンド語ではすなわち 'Izrā'il の歯」の意であると述べられ、死の天使とも関連付けられている [BQ: II, 586a]。 *Ḡam* は古代イランの英雄王 *Ḡamsīd* の短縮形で、インドには *Yama* (閻魔) として伝えられた。インドでは、*Yama* は神となった不死の人間、あるいは死を最初に経験して死の神となった者とされる [Huart & Massé E12: *Djamshīd*]。 *Platts* によると、ヒンディー語で *ḡam-dhar* は “death-bearer” の意とされるが [Platts: 387b, 388b]、*Pant* によると、正しくは *ḡamadhar* であり、その語源は *Ḡam* ないし *Yama* の sharp edge あるいは歯を意味するという [Pant 1980: 163]。また、[Alexander, Pyhrr & Kwiatkowski 2015: 217-218] も参照。 (W)

12 両刃で刀身の湾曲した短剣の一種 [Pant 1989: 231]。短剣として史料に頻出する *ḡanḡar* との違いは、*Haider* に従えば、柄にナックル・ガードが付いていることである [Haider 1991: 202]。 *Beveridge* が指摘しているとおり、*Akbar Nāmāh* の諸写本のうち、独自の異文を多く含む大英図書館所蔵の一写本 (Add. 27247) には「ヒンドの言葉で *khapwah* と呼ばれる短剣 (*dašnah*)」というくだりがある [AN ms.: f. 244v, l. 20; AN (Etr.): III, 44-45, n. 5; Pant 1980: 180]。 *JN* では君主からの下賜品として *khapwah* が度々言及されている [JN (A): 77 *et passim*; JN (T): 92 *et passim*]。例外的に *khapwah* が献上された例は、即位第10年のノウルーズの祝宴に際して、*Mahābat Ḥān* が「10万ルピー」に及ぶ価値がある *khapwah* を献上した例である [JN (A): 139; JN (T): 161]。 (M)

13 *kārd* は、直刀の短刀で、鏢の無いもの。ムガル帝国時代の伝世品と文献上の *kārd* の語が結びつく例としては、*Ḡāhāngīr* に帰される1621年製作の *kārd* がある (The Freer Gallery of Art: F1955.27a-b)。1621年4月19日、*Ḡāhāngīr* 一行が行軍の途上 *Ḡālandhar* に滞在していたとき隕石が落下した。これを検分した同地の徴税官が進呈したその鉄塊は160 *tōlah* におよぶもので、この隕鉄を材料として太刀2振り、短剣1本、そして小刀 *kārd* 1本が製作された。この伝世品の *kārd* に施された刻文は *Ḡāhāngīr Nāmāh* に引用された詩文とおおよそ同内容である [JN (T): 374-375; Atil, Chase & Jett 1985: 220-225]。 (M)

14 騎兵が用いる槍で、穂は鋼鉄、柄は竹ないしヤシ材が用いられた [Irvine 1903: 82]。 *nizah* の画像資料と文献資料が符合する例としては、1572年12月、*Akbar* が指揮した *Guḡarāt* 地方への遠征のなか、*Sarnāl* で *Akbar* の部隊に急襲をかけた敵兵を、騎乗した *Rāḡah Bhagwant Dās* が *nizah* で撃破した記事 [AN: iii, 15] に対応する、*Akbar Nāmāh* 写本 (*Akbar* 時代に制作) の挿絵 (Chester Beatty Library, ms. In03, f. 163r) がある。 (M)

15 *Egerton* は18世紀半ばマイソールに伝わる武具の中に、全部品が鋼鉄でできた

る。BHDAYN¹⁶およびその他の弓が86張ある。24張が月単位で (bi-māh) 戻される。毎月二揃い【が使われる】。30張は週単位で【戻され】、毎週一揃い【が使われる】。32張は太陽暦の月の日付単位で【戻される】¹⁷。以上と同様に、それぞれ【の武具】に対して等級が決められている。

御騎行や一般謁見の際には、アミールの子息たち、その他のマンサブダールたち、アハディーたちが武具を手や肩に帯びる。矢筒、弓、太刀、盾の4種それぞれを4人ずつ持つのである。槍、バルチャ槍、タバル斧 (tabar)、ザーグヌール斧 (zāgnūl¹⁸)、槌矛 (piyāzi)、ガプティー (gaptī¹⁹)、弾弓 (kamān-i

“Birch'hā”を挙げており、これを踏まえた Irvine は nizah に比して重量のある barčah は歩兵が用いたものと推測している [Egerton 1896: 123; Irvine 1903: 83]。(M)

ヒンディー語で、barčāh あるいは baračhā は槍ないし投槍を意味する [Platts 1884: 146a; 古賀・高橋 2006: 929a]。Farhang-i Ġahāngiri および Farhang-i Rašidi では barčah と綴られ、しばしばヒンドゥースターンの人々が持っている小さな槍で、barčah とも言う、と伝える [FJ: I, 847; FR: I, 130]。後述する Langlès の図では、17. Bertchéh あるいは Bertchehā 投げ槍としてあらわれる (注27参照)。(W)

16 A写本ではBHDAYとあり、B写本、C写本は底本と同じ綴りである [AA Ms. A: 51v; AA Ms. B: 55v; AA Ms. C: 45r]。mašhadī と並列されていることから地名である可能性が考えられるが、現時点では同定できない。Blochmann はこれを “Bhadāyan” と読んでいるが、根拠は不明である [AA (Etr.): I, 116]。(W)

17 Blochmann は、弓に関するこの一連の文を “The text has an unintelligible sentence.” として、訳を完成させていない [AA (Etr.): I, 129]。(W)

18 tabar は “hatchet, axe, or mattock”, zāgnūl は “A mattock, a battle-axe” で、いずれも戦斧を意味する [Steingass 1892: 279b, 606b]。zāgnūl については、Burhān-i Qāṭi' において、地面を掘ったり戦闘に用いたりする「鉄製で、曲がった先端と柄がついた道具」と説明される [BQ: II, 998b]。また Farhang-i Rašidi では、「カラス (zāg) の嘴 (nūl) のように細く先端の尖った」tabar (本文は tīr と綴るが tabar の誤植だろう) である、とされる [FR: I, 359]。Haider によると、タバルが三日月型の刃を持つものを含め、様々な形状と大きさの戦斧を含むのに対し、ザーグヌールは槍のような先端の尖った刃を備えた戦斧であり、さらにこれらの二つの形の刃を1本の柄に備えたものがタバル・ザーグヌールと呼ばれたという [Haider 1991: 234-235]。後述する Langlès の図では、13. Tébér Zāghnaoul つるはし、14. Tébér 斧としてあらわれ、両者はかなり異なる姿で描かれている (注27参照)。また、本書の後出の表からは、実際に当時これら3つの名称がそれぞれ別のものを指していたことが分かる。ここではひとまず Blochmann に従い、タバルとザーグヌールの2種類とみなして訳す [AA (Etr.): I, 116]。なお、Gladwin は “a tubber-zaghnowl” とまとめて訳している [AA (Etr.) Gladwin: I, 118]。(W)

19 底本の綴りは、後述の表にある gaptī-aṣā および gaptī-kārd の前半と一致しており、ここでの読みは同表の発音にしたがう。この発音とは母音が異なるが、ウルドゥー語・ヒンディー語では guptī で hidden sword、「仕込み杖」あるいは「仕込み杖などの仕掛け」を指す。なお、guptī には、protecting, concealing, concealment といった意味もあ

gurūhah)、白檀の棍棒 (kutak-i şandali) を然るべき規則により帯びる。数列²⁰のラクダとラバも <I, 119> 様々な武器を装備する。巡行の際には車輛やプフティー種のラクダ (buḥti²¹) およびその他をいくたりか伴って行く。幸福なる謁見場においてはアミールたちやその他の人々が武具 (qūr²²) に相対して立ち、服務に備えている。御騎行に際しては、御進行に続いて武具が進むが、【先払いをする】数名の側近たちは別である。装備を着けた象たち、ラクダたち、荷車、およびティンパニ、旗幟、カウカバ、その他の王朝の権威²³が武具とともに

る [Platts 1884: 895b; 古賀・高橋 2006: 350b]。[Irvine 1903: 77; Pant 1980: 44-46; Haider 1991: 212] も参照。(W)

20 「列」 qīṭār はこの場合、同じ種類の動物5頭からなるグループを意味する。帝国軍団においてはラクダとラバが qīṭār を単位として編成されていた [AA: I, 147; 152]。(M)

21 大型、長毛のフタコブラクダ。ホラーサーン地方の種類で、buḥti という名称は新バビロニア王国のネブカドネザル王 (アラビア語で Buḥt Naṣār) がアラブの雌ラクダとアジャムの雄ラクダを交配させてこの種を作ったとの説に由来する [Dihhā: buḥti]。繁殖能力はなく、主に駄獣として使われた [Pellat EI2: Ibil]。(W)

Kašmīr のチャク朝君主 Sulṭān Zayn al-Ābidīn (位 1420-1470) の時代に、ティムール朝君主 Abū Sa'īd (位 1451-1469) の治める [Ḥurāsān からアラブ馬とプフティー種のラクダ (šutur-ān-i buḥti)] が贈られたとの所伝がある [TA: III, 440]。(M)

22 ムガル帝国時代の史料において qūr はふつう武具全般を指す [AA (Jtr.) (3) : 134, n. 58]。この語が君主の騎行や一般謁見の際の宮廷で使われていたことについては、Bernier も注目している。ただし、彼は qūr を王の権威を示す金属製の馬印のようなものを指すと解していたようで、「彼らの前を、華々しくクルと呼ばれるものが通ります。美しく細工の良い銀の太い棒の先につけられた、多くの銀の彫像のことです」と述べる [Bernier: 262; Bernier (Jtr.): 224]。また、Aurangzib の行進の際にこれが見られたことについて、以下のようにも伝えている。「これら様々な行進には、常に大人数のオムラーやラージャがお供します。彼らはただちに、雑然とした塊となって馬で従います。(中略) オムラーの周りや彼らの間には、常に立派な馬に乗った多くの騎兵がいます。一種の銀の棍棒または楯矛を持っているために、グルズ・バルダールと呼ばれています。王御自身の前に行く左右両翼の側にも、徒歩の召使達の多くと一緒に彼らは常に大勢います。これらのグルズ・バルダールは、選ばれた人々で、顔つきも体つきも良く、勅令を伝達する役目に当てられており、全員大きな棒を手にしており、人々をうんと遠くに遠ざけ、王の御前を誰も歩かないようにします。ラージャに続いて、クル (cours) が多数のティンパニーやトランベットの奏者に混じって進みます。すでに他の所で述べましたが、クルというのは銀の彫像にほかなりません。奇妙な動物や、手や、秤や、魚や、その他得体の知れぬものを表しており、大きな銀の棒のようなものの先につけて運びます。最後に多くのマンサブダールつまり下級オムラーが立派な馬に乗り、剣と矢と箆で立派に武装して、今言った全ての後から従います。この一団はオムラーのよりもずっと大人数です」 [Bernier: 384-385; Bernier (Jtr.): 337]。(W)

23 ティンパニ以下のものについては、本書既出の「王権の権威の規則」で言及されている [AA: I, 45-46; AA (Jtr.) (3) : 133-137]。(W)

にある。忠勤のヤサウル²⁴たちが務めを果たし、ミール・バフシ²⁵たちもそれを助ける。狩場では数名の俊足の (tiz tak²⁶) 歩兵たちが【同行し】、一部の者たちが装備をもって行く。

調査を簡便にするために【武具の館の】現状の一部を表にして示し、一部【の武具】は図で明らかにしよう²⁷。

24 ヤサウルについては [AA (Jtr.) (4) : 41-42, n. 21] 参照。(W)

25 ミール・バフシ (軍務長官) については [真下 2012]。(M)

26 底本は tiz tag だが、三写本の表記に従い改めた [AA Ms. A: 51v; AA Ms. B: 55v; AA Ms. C: 45r]。(W)

27 底本にはないが、参照した三写本ではいずれも表に続いて武具を描いた図が見られる [AA Ms. A: 53r-v; AA Ms. B: 57r-v; AA Ms. C: 46v-47r]。図に描き込まれた武具の数や大まかな形状は三写本のいずれも同様である。このことはこれらの写本が、何か同一の原型を継承していることを示しているはずである。それゆえ、英語訳やデリー石版本に収録されている異なる内容の武具の図に比しても、三写本の図は本源性が高いものと考えられる。ただし図に描かれた武具にはキャプションがなく、本書で記述される武具のいずれにあたるのか、定かではない。描かれた武具は35点であるが、本書の表で示された武具の数とあわないので、図と表との関係もはっきりとはしない。なおフランスの東洋学者 L. Langlès が、1821年に出版したインド誌のなかで、同じ構図の武具の図をその著作に採録したうえで、個々の名称 (場合により解説も) を記入している [Langlès 1821: plates between pages 226 and 227]。比定の根拠は示されていないうえ、記入された武具の名称は本書に言及されていないものもあるため、その案を全面的に受け入れることはできない。しかし後の Egerton がこれに依拠した図版をその著作に載せ、その後の Irvine や Pant らの研究者が Egerton に拠っていることを考慮すると、Langlès の図の重要性は無視できない (但し例えば以下 34. 「Sary 弩弓の一種」と記入された武具を、Egerton は本文の表に言及される qašqah (馬の頭部の防具) にあてるなど、両者の差異はある [Egerton 1896: 23, pl. 1])。そこで参考材料として Langlès の記入を以下に採録し、訳者が図 1, 2 の個々の武具に付した番号とともに示した。名称の翻字は Langlès の行ったとおりとし、解説は日本語に訳した。Langlès の図版のタイトルは以下: インドの攻撃用・防衛用の武具。『アクバルの諸制度』の原写本の色付素描の模写。

1. Bânèh 剣; 2. Djemdhâr 短剣; 3. Djemdhâr Dou-liçânèh 二叉の短剣; 4. Djemdhâr Seh-liçânèh 三叉の短剣; 5. Khapouah 別の種類の短剣; 6. Djembouah 別の短剣; 7. Katâréh あるいは Katary 鋭利な短剣; 8. Bânk 別の短剣; 9. Nersing Mouttah ネルシングの柄; 10. Djéguer Beçoulah (肝臓の斧) 槌矛; 11. Guyty Kâred 世界の短刀; 12. Tehàcou 折りたためる短刀; 13. Tébér Zâghnaoul つるはし; 14. Tébér 斧; 15. Terngâlèh 別の斧; 16. (翻字無し) 殺竿; 17. Bertchèh あるいは Bertchehâ 投げ槍; 18. Tchehoutah 両端が穂になっている投げ槍; 19. (翻字無し) 槍; 20. (翻字無し) 刀; 21. Kémân 弓; 22. Maktâh 別の弓; 23. Dhedhy 矢筒; 24. Déhâl 盾; 25. Siper 別の種類の盾; 26. Phéry 別の盾; 27. Bhelhetah 鍔に覆いがある剣; 28. Adhânèh (解説無し); 29. Khok'houah (解説無し); 30. Kantah-Soubhâ 首当て; 31. Anguer-Ker 上着、ローブ; 32. 別の Anguer-Keh; 33. Behndjou 喉当てを備えた鎧; 34. Sary 弩弓の一種; 35. Gardany 馬衣。なお英語訳に収録された武具の図と名称・解説との対応は [AA (Etr.) : I, xxiii-

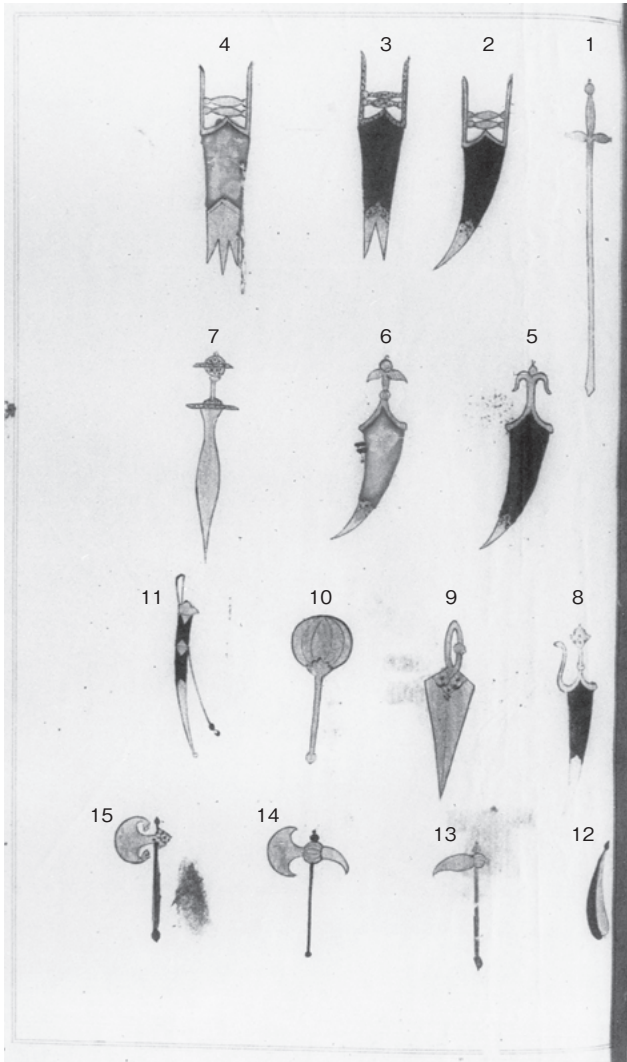


図1 ©The British Library Board. [AA Ms. A: 53r] (図中のアラビア数字は、注27に示したLanglès所収の図・解説との対応を示すために、訳者が追記したものである)

xxiv] にある。例えば短剣の一種である *Bāng* についても、Langlès の図 (8) と英語訳の図 (pl. XII) の (8) が呈する形状はまるで異なっており、これらの図像資料の取扱

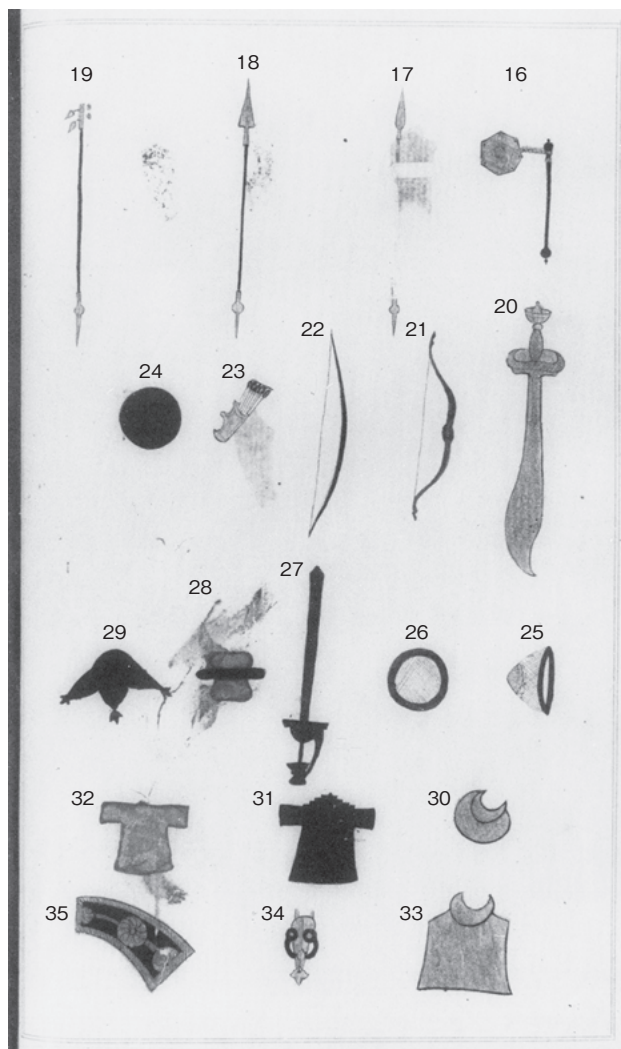


図2 ©The British Library Board. [AA Ms. A: 53v] (同)

いの難しさをうかがわせる。(M)

<I, 119-124>

名前 ²⁸	読み	価格
太刀 (šamšīr)		1/2ルピーから15ムフル
カーンダー (khāndah ²⁹)	カーフと隠れたハーのファトゥハ、アリフ、隠れたヌーン、ヒンド語のダールのファトゥハ、書かれただけのハー	1から10ルピー
ガプティー杖 (gaptī 'ašā) (太刀のことを言う)	ペルシア語のカーフのファトゥハ、ペルシア語のバーのスクーン、上双点付きターのカストラ、下双点付きヤーのスクーン	2から20ルピー
ジャムダル (ḡam-dhar)	ジームのファトゥハ、ミームのスクーン、ダールと隠れたハーのファトゥハ、ラーのスクーン	1/4ルピーから2 1/2ムフル
短剣 (ḡanḡar)		1/2から5ルピー
カプワー (khapwah)	カーフと隠れたハーのファトゥハ、ペルシア語のバーのスクーン、ワーウのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2ルピーから1 1/2ムフル
ジャムカーク (ḡam-khāk ³⁰)	ジームのファトゥハ、ミームのスクーン、カーフと隠れたハー、アリフ、カーフのスクーン	1/2ルピーから1 1/2ムフル
バンク (bānk ³¹)	バー、アリフ、隠れたヌーン、カーフのスクーン	1/2ルピーから1ムフル

28 この見出し項目の行は底本にはないが、三写本に従い補った [AA Ms. A: 52r; AA Ms. B: 56r; AA Ms. C: 45v]。 (W)

29 ヒンディー語で khāndā は、「A straight double-edged sword」、両刃の剣を意味する [Platts 1884: 868b; 古賀・高橋 2006: 294a]。 (W)

Pantによれば、刀身が直刀で先端が丸く、先端にかけて幅がやや広がる長刀であり、先端部のみ両刃という [Pant 1980: 48-51]。 ḡahāngīr はヒマラヤ南麓の Kumāūn 地方の領主が服属した際に貢納した同地の特産品の中に「彼らの言葉で khāndah とよばれている太刀 (šamšīr) と、彼らの言葉で katārah とよばれている短剣 (ḡanḡar)」に言及している [JN (A) : 106-107; JN (T) : 124] (JN (T) は校訂の誤りによって当該箇所を欠くが、底本となった手写本により JN (A) と同文を補える)。 (M)

30 不詳。Irvineはこの語を、「戦斧」を意味する čamḡah、あるいは「ナイフ」を意味する čāqčāq の誤記である可能性を示唆するが、この箇所は短剣を列挙している文脈の中にあるので従いがたい [Irvine 1903: 87]。 (M)

注11に既述の ḡam とヒンディー語の khāg (犀の角や猪の牙を指す) [Platts 1884: 868a] から「Yamの角」の意で剣あるいは短剣の一種の呼称か。 (W)

31 「曲がっていること、湾曲」を意味するヒンディー語。湾曲した刃を持つ短剣の一種 [Platts 1884: 127b]。 Langlès の図中の武具 (8) と英語訳の図中の武具 (8) が呈する形状はかなり異なる一方、Egerton は bānk には言及しない。さらに Pantによれば、鎌状に湾曲した刀身を備えた短刀であるという [Pant 1980: 150-151]。かくのごとく、この武具の詳細については十分な判断ができない。 (M)

ジャンプワー (<i>ḡanbwah</i> ³²)	ジームのファトゥハ、隠れたヌーン、バーのスクーン、ワーウのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2ルピーから1ムフル
カターラー (<i>katārah</i> ³³)	カーフのファトゥハ、ヒンド語の上双点付きター、アリフ、ラーのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2ルピーから1ムフル
ナルシングムート (<i>narsing mūth</i> ³⁴)	ヌーンのファトゥハ、ラーのスクーン、スイーンのカスラ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフのスクーン ³⁵ 、ミームのダンマ、ワーウのスクーン、ヒンド語の上双点付きターと隠れたハー 【のスクーン】	1/2から2ルピー ³⁶

32 不詳。Irvineが紹介するとおり、*Hobson-Jobson*はこの語を *ḡanbiyyah* と読み替えた上で、この語がアラビア語の *janb* に由来するもので、腰に帯びる短剣の一種だとする [Irvine 1903: 87; Yule & Burnell 1903: 468b]。その読み替えは、Egertonが“*Jambiya*”という名称の、刀身がカーブした短剣の実例を複数挙げていることによる [Egerton 1896: 82, 116, 124, 155-156, 165]。しかし本書が発音を解説していることから、この語は何らかのインド語由来であると考えられるので、この考証には従えない。(M)

33 ヒンディー語で *khaiār*。幅広でまっすぐな刃を持つ大型の短剣。柄が二又になっており、その間に渡された横木を握って扱う [Platts 1884: 813b; 古賀・高橋 2006: 184a]。この形状は既出の *ḡam-dhar* を指したものと思われるが(注11)、Pantによる *katārah* と *ḡam-dhar* とを同一と見なす学説は誤りであるという [Pant 1980: 174]。Langlèsの図解でも、*Djemdhar* と *Katāreh* はまったく異なる外見となっている [Langlès 1821: plates between pages 226 and 227]。*Farhang-i Ḡahāngīri* では、*katārah* または *katālah* として見られ、ヒンドの人々固有の「短剣 (*ḡanḡar*) の一種」とされる [FJ: I, 696]。また注29も参照。*Nāṣir-i Ḥusraw* が伝える、*Makkah* 巡礼に来るイエメンの人々が「インド人のように」腰に差している「カティーフ製/風の短剣 (*katārah*)」と、この *katārah* の語が *qatālah* に由来するとの説については [SN (Jtr.): 31] を見よ。(W)

Bābur Nāmah には *katārah* の語形であらわれ、「広刃の短剣」ないし ‘*poindard*’ と訳されている [BN: 477; BN (Jtr.): 475; BN (Etr.): 528]。(M)

34 短剣の一種。Langlèsは図1の(9)の武具にこれを当て、EgertonもIrvineも従うが、その根拠は定かでない [本訳注62-63頁; Egerton 1896: pl. 1, no. 30; Irvine 1903: 87]。ヒンディー語で *narsingh* はヴィシュヌ神の第4化身である人獅子、*mūth* は拳を意味する [Platts 1884: 1132a; 古賀・高橋 2006: 1098a]。なお、*Haidar* はこの語を *nar-singh-moth* として “death of the male tiger” の意と解するが [Haider 1991: 213]、*singh* はヒンディー語で獅子を指し、死を意味する *mawt* はアラビア語であって *mūth* にはなり得ず、従えない。(W)

35 底本の *sukūn-i kāf* をA写本およびC写本に従い *sukūn-i kāf-i fārsi* と改めた [AA Ms. A: 52r; AA Ms. C: 45v]。(W)

36 底本では *nīm rūpayah tā dū muhr* だが、最後の *muhr* を記さない三写本の記述に従い、読みを改めた [AA Ms. A: 52r; AA Ms. B: 56r; AA Ms. C: 45v]。(W)

弓 (kamān ³⁷)		1/4 ルピーから3ムフル
タフシュ・カマーン (taḥṣ kamān ³⁸)		1から4ルピー
ナーワク (nāwak ³⁹)		1/2 ルピーから1ムフル

37 kamānが矢を放つ弓だけでなく、砲弾等を発射する何らかの装置をも意味したことについては以下の注38を見よ。(W)

38 taḥṣは、Steingassによると“A cross-bow, an arrow, a rocket”とされ [Steingass : 288a]、Dihḥudāでは、矢の一種、ないしロケット砲の弾を指し、さらに一部では弓の一種を意味するという [Dihḥudā: taḥṣ]。Farhang-i Rašīdīによると、taḥṣは「tirを据えてそこから放つ弓の一種」であるとされる [FR: I, 200]。Bābur Nāmahには taḥṣ oqiであらわれ、「弩弓の矢」と訳されている [BN: 46; BN (Jtr.): 61]。Haiderは taḥṣ を“A crossbow”と解しており、Zafar Nāmahの15世紀の写本に見られるもの (Baltimore: Walters Art Gallery on indefinite loan from John Work Garrett Library of Johns Hopkins University, Baltimore, Call number 350P/ 1467/ BaWG-a/ 449b) を指すと述べる [Haider 1991: 186]。一方、Irvineは taḥṣ kamānを英語訳所収の図 (pl. XII) の(12)、つまり a small bow であると述べる [Irvine 1903: 95]。Pantも small slur bow とする [Pant 1989: 35]。なお、Langlèsの図においては、2張描かれた弓のうち kamānではない方の弓 (22) に対して「Makttah 別の弓」との解説が付され、Egertonもおそらくこれに倣って maktah とする [Langlès 1821: plates between pages 226 and 227; Egerton 1896: 23, pl. 1]。ただし、maktahないし maktahにあたる語は本書の表には見られない (注27参照)。(W)

1398-99年、ティムールの遠征軍に対峙したトゥグルク朝軍について、最も本源的な史料である Giyāt al-Dīn ‘Alī の従軍記は、この敵軍が120頭からなる戦象部隊を備えており、「象たちの戦列の脇には、ṭaḥṣ wa ra’d andāz-ānが立っていた」と伝える [RGH: 115]。同書の異文は ra’d-andāz-ān wa ṭaḥṣ-afkan-ān とし [RGH: 114]、Šāmi も同文を呈する一方 [ZNSH: I, 190]、Yazdī は ṭaḥṣ-dār-ān wa ra’d-andāz-ān [ZNY: 320b] とパラフレーズしている。いずれにせよ taḥṣ も ra’d も何らかの飛翔体兵器であったことは確実であり、これを発射する何らかの装置を歩兵が携行していたこともうかがえるが、それらが火薬の燃焼を推進力としていたことの確証はない。Khan は Yazdī のみを引いて ra’d を light cannons or some kind of narnals と推断するが、その根拠は示さない [Khan 2004: 55, n. 25]。一方 Khan は、火薬の燃焼によって ra’d を発射する真鍮ないし青銅製の火器 kamān-i ra’d が15世紀後半にティムール朝支配地域からインドに導入されたとしているが、14世紀末にトゥグルク朝軍に配備されていた ra’d そのものを携行火器と解することとの整合性は説明していない [Khan 2004: 42-44]。要するに、本表における taḥṣ kamān が何らかの火器であるか、従来型の弓であるか、定かではない。したがってこの kamān が従来型の弓であるか、火薬を推進力に利用した発射装置であるかも定かでない。それゆえ、本訳注では kamān を「弓」ないし「カマーン」と訳し分けた。(M)

39 小型の矢 [Steingass 1892: 1382a-b]。Farhang-i Rašīdīによると、「より遠くに達するように、細い船のような形の鉄製または木製の鞆状のもの (gilāf) を通させて、弓で

矢 (tīr)		1束につき $\frac{1}{2}$ から30ルピー
矢筒 (tarkaš)		$\frac{1}{4}$ ルピーから2ムフル
ダディー (dādī ⁴⁰)	ヒンド語のダールのファトゥハ、ヒンド語のダールのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	$\frac{1}{4}$ から5ルピー
矢抜き (tīr-bardār ⁴¹)		1から2 $\frac{1}{2}$ ゲーム
矢じり抜き (paykān-kaš)		$\frac{1}{4}$ から3ルピー
槍 (nizah)		1 $\frac{3}{4}$ ルピーから6ムフル
バルチャ槍 (barčha)	バーのファトゥハ、ラーのスクーン、ペルシア語のジームと隠れたハーのファトゥハ	$\frac{3}{4}$ ルピーから2ムフル
サーング (sāng ⁴²)	スイーン、アリフ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフのスクーン	$\frac{1}{4}$ から1 $\frac{1}{2}$ ルピー

放つ小さな矢」であり、そのために *nāwak* (小舟) と呼ばれる、という [FR: II, 256]。この舟形のは葦、木、あるいは金属で作られ、長さ7～12インチの (通常より短い) 投げ矢を普通の弓で撃つためのガイドとして使われる [Haider 1991: 186]。 *Bābur Nāmah* では Samarqand の籠城戦の際に Bābur 自身がこれを射たと記されており、日本語訳では「小箭」と訳されている [BN: 135-136; BN (Jtr.) 146-147]。(W)

40 不詳。(W)

41 Blochmann は、この語について、その綴りが正しければ次の *paykān-kaš* と同じものを指すとして、いずれも *arrow drawers* と訳す一方で、*tīr-bardār* については、*tīr-i pardār* すなわち矢羽根の付いた矢を意味するかもしれない、と述べる [AA (Etr.): I, 117, n. 1]。Irvine は、おそらく Blochmann に倣って、*tīr-bardār* は *paykān-kaš* と同様に矢を抜くための別の道具を指すとし、後者が英語訳の図に見える *no.* 「146」(明らかに誤植で、14b のことだろう) であると述べるが、その根拠は示されていない [Irvine 1903: 101]。*tīr* が「矢」を指すのに対して、*paykān* は「矢じり」を意味することから [Dihhūdā: *tīr*; *ibid.*: *paykān*]、ここでは *paykān-kaš* を「矢じり抜き」と解し、*tīr-bardār* についてはひとまず「矢抜き」と訳した。(W)

42 ヒンディー語で槍、投げ槍、あるいは投げ矢や家畜を追うための突き棒を意味する [Platts 1884: 629b; 古賀・高橋 2006: 1333b]。[Haider 1991: 243] によると、バルチャ槍より短く、騎兵が用いるもので、三角錐あるいは四角錐の槍頭を持つとされる。[Irvine 1903: 83-84] にも同様の記述が見られる。(W)

Langlès, Egerton の図にはこれに当たる武具は明示されていないが、英語訳では、他の槍よりも短く大型の穂を備えた槍 (18) の図像がこれに当てられている [AA (Etr.): I, xxiii, pl. XII]。(M)

サインティー (saynthī ⁴³)	スイーンのファトゥハ、下双点付きヤーのスクーン、隠れたヌーン、上双点付きターと隠れたハーのスクーン、下双点付きヤーのスクーン	1/4から1ルピー
セーララー (sēlahrah ⁴⁴)	スイーンのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラームとラーのファトゥハ、書かれただけのハー	10ダームから3/4ルピー
棍棒 (gurz)		1/4から5ルピー
六角棍棒 (šaš-par)		1/2ルピーから3ムフル
キースティン棍棒 (kistin ⁴⁵)		1から3ルピー
タバル斧 (tabar)		1/4ルピーから2ムフル
槌矛 (piyāzī)		1/2から5ルピー
ザーグヌール斧 (zāgnūl ⁴⁶)		1/2ルピーから1ムフル

43 底本ではSNTHYだが、三写本の綴りと底本・三写本の「読み」に従い改めた [AA Ms. A: 52r; AA Ms. B: 56r; AA Ms. C: 45v]。ヒンディー語では、sainṭīで鉄の槍あるいは投槍を意味する [Platts 1884: 713b]。(W)

44 不詳。英語訳の図では (24) として saynthīと同じく、短い槍の図像がこれに当てられている [AA (Etr.): I, xxiii, pl. XII]。Irvineはこれを槍の一種とみており、ヒンディー語で槍を意味する単語 sel に付会している [Irvine 1903: 84]。(M)

45 A写本ではKBYTN、B写本では底本と同じKYSTN、C写本ではKHSTNと綴る。Blochmannによると他にKHYSTN, KPTN, GPTYN, KNYN, KBTNと綴る写本もあるとのことで、Blochmannは“Kestan (?)”として訳しておらず [AA (Etr.): I, 121, n. 1]、難読語であったことが推測される。(W)

kistinあるいはkistan [BN (Etr.): 160, n. 4; BN (Thackston): I, 209]。鎖あるいは紐で木製の取っ手に結びつけられた鉄製の球あるいは棒であり、kiskinとも綴る [Zenker 1866: 785a]。Sanglāḥはkiskinを、棍棒 (gurz) であり、その先端が鎖あるいは革紐で取っ手に取り付けられたもの、ペルシア語ではpiyāzīという、と説明している [SL: 239a]。そうすると本書に後出する piyāzī との違いは分からなくなる。なおBābur Nāmāhには武器の名称が列挙される箇所でのこの語が見える: šaš-par wa piyāzī wa kistin wa tabar-zīn wa bāltū。この部分の日本語訳は以下: 「6つの出っぱり付きの矛や普通の矛、また棍棒や戦斧や斧」。英語訳は以下: the shash-par (six-flanged mace), the piyāzī (rugged mace), the kistin, the tabar-zīn (saddle-hatchet) and the bāltū (battle-axe) [BN (Etr.): 160]。(M)

46 英語訳の図では、斧刃の先端が尖った形状の武具 (24) にこの語が当てられている [AA (Etr.): I, xxxiii, pl. XII]。同じ形状の武具は上記図1で13に見えるが、Langlèsはこれに後出する tabar-zāgnūlの語を当てており、見解を異にする (注27参照)。(M)

チャカル・バソーラー (čakar-basōlah ⁴⁷)	ベルシア語のジームとカーフのファトゥハ、ラーのスクーン、バーのファトゥハ、スイーンのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン ⁴⁸ 、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー	1から6ルピー
タバール・ザグヌール (tabar-zāgnūl ⁴⁹)		1から4ルピー
タランガーラー (tarangālah)	上双点付きターとラーのファトゥハ、隠れたヌーン、ベルシア語のカーフ、アリフ、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー	1/4から2ルピー
小刀 (kārd)		2ダームから1ムフル
ガプティーに仕込んだ小刀 (gapti-kārd)	ベルシア語のカーフのファトゥハ、ベルシア語のバーのスクーン、上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	3ルピーから1 1/2ムフル
鞭に仕込んだ小刀 (qamčī kārd ⁵⁰)		1から3 1/2ルピー
チャーケー (čāqū ⁵¹)		2ダームから1/4ルピー
弾丸のカマーン (kamān-i gurūhah ⁵²)		2ダームから1ルピー

47 ヒンディー語 čakra に「鋭利な刃を持つ飛び道具 (円盤形の古代の武器)」の意がある [古賀・高橋 2006: 387b]。basūlā はヒンディー語で「大工が使う斧の一種、あるいは手斧」を意味する [Platts 1884: 156b; 古賀・高橋 2006: 936a]。(W)

英語訳の図では (25) の武器がこれに当てられており、円形の武器と柄の付いた何らかの刃物の二つからなる図像を呈している。その用途は不明であるが、英語訳は両者を別個の武器とみている [AA (Etr.): I, xxiii, pl. XII]。(M)

48 三写本の「読み」の項目には sukūn-i wāw が不在だが [AA Ms. A: 52r; AA Ms. B: 56r; AA Ms. C: 45v]、「名前」の項目の綴りには w が入っているため、ここでは底本の「読み」に従う。(W)

49 戦斧の一種であるが、実態は定かでない。写本の図 (図1) には幅広の刃先を有する斧 (tabar) と先端が尖った斧刃を有する斧 (zāgnūl) の特徴を併せ持つものが描かれており (14)、英語訳の図もその形状の武器 (26) にこれを当てる [AA (Etr.): I, xxiii, pl. XII]。ただし Langlès はこの形状の武器を tabar としており、見解を異にする (注27参照)。(M)

50 qamčī kārd は鞭の柄に仕込んだ小刀 [Haider 1991: 212]。qamčī は鞭のこと [Doerfer 1963-1975: III, 509-510]。qamčī については、Bābur Nāmah では qamčī dastahsī として見られ、「むちの柄」と訳されている [BN: 9; BN (Jtr.): 18]。(W)

51 Blochmann は“A clasp knife”と補う [AA (Etr.): I, 117]。Doerfer によればモンゴル語に由来するか [Doerfer 1963-1975: I, 303-304]。Irvine は英語訳の図に見える (31) とみなす [Irvine 1903: 89]。(W)

52 A写本、C写本では gurūhah kamān [AA Ms. A: 52r; AA Ms. C: 45v]。Burhān-i Qāṭī' で

カムタ (kamīḥa ⁵³)	カーフのファトゥハ、ミームのスクーン、ヒンド語の上双点付きターと隠れたハーのファトゥハ	5ダームから3ルピー
トゥファキ・ダハン (tufak-i dahān ⁵⁴)		10ダームから2ルピー
背中搔き (pušt ḥār ⁵⁵)		2ダームから1/2ルピー
シャスト・アーヴィーズ (šašt-āwiz ⁵⁶)		2ダームから1ルピー
ギリフ・クシャー (giriḥ kušā ⁵⁷)		1ダームから1/4ルピー
ハーリマーヒー (ḥār-i māhi ⁵⁸)		1から5ルピー

は、kamān-i qurūḥah、あるいは kamān-i gulūlah に同じとされ、「弾丸 (gulūlah) や土の球 (muhrah-i gil) を打つ弓」であり、アラブ人はこれを qaws al-banādiq, qaws al-ḡulāhiq と呼ぶ、という [BQ: III, 1692b]。アラビア語で qaws al-bunduq として知られる弓は、専ら鳥を撃つために使われていた弩の原型であり、預言者ムハンマドの時代には既に知られていた。投射物には ḡulāhiq ないし bunduq (複数形 banādiq) と呼ばれる固められた泥でできた球が使われた。ただし、こうした弾丸や球体を撃つ際には手引きの弓も弩も利用されることがあった [Boudot-Lamotte EI2: Ḳaws]。Bābur Nāmah には kamān-i gurūḥah の形で見られ、「石弓」と訳されている [BN: 258; BN (Jtr.): 260]。(W)

- 53 ヒンディー語で、A bow (especially one made of bamboo) [Platts 1884: 848a]、[弓；長い杖、護身用の長く高い竹竿] [古賀・高橋 2006: 196a] を意味する。(W)
- 54 Blochmann は “A blow-pipe” と訳している [AA (Etr.): I, 118, n. 1]。一種の吹き矢の矢筒だが、とくに clay balls を発射するためのものを指す [Steingass 1892: 314a]。Farhang-i Ġahāngiri では tufak として見られ、以下のように説明される。「槍 (nizah) の長さの中空の棒であり、泥で作られた弾丸 (gulūlah) をその中に置き、ぷっと吹くと息の力でその弾丸が飛び出す。雀のような小さな生き物をそれで撃つ。bunduq のことを同様に tufak と呼ぶ」 [FJ: II, 1467]。Farhang-i Raṣīdi でもほぼ同様の説明が見られる [FR: I, 210]。(W)
- 55 「背中を搔くもの」の意で「馬ぐし」をも意味するペルシア語であるが、英語訳の図は手の形をした鎗矛を示しており (35)、Irvine もこれに従っている [AA (Etr.): I, xxiv, pl. XIII; Irvine 1903: 80]。(M)
- 56 弓射の際に用いる指ぬき。Irvine が指摘しているとおおり、18世紀半ばの Ānand-rām Muḥliṣ が著した語彙集 Mirāt al-İṣtilāḥ によると、「象や魚の歯で作った物で、これを弓射の際の指ぬきにする」という [MI: 481]。(M)
- 57 字義は「結び目解き」。Haider によると、長い槍の一種で、槍頭には下向きの三日月型の刃の上に出っ張った尖頭が付いている [Haider 1991: 244]。英語訳の図では (36) で、Haider の説明する形状のものが示されている [AA (Etr.): I, xxiv, pl. XIII]。(W)
- 58 字義は「魚の鉤爪」だが、Haider によると、大きく鋭い骨が両側に突き出した大型

ゴーパン (gōphan ⁵⁹) (投石器のこと)	ベルシア語のカーフのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、ベルシア語のパーと隠れたハーのファトゥハ、ヌーンのスクーン	1 1/2 ダームから 1/4 ルピー
ガジュバーク (gaḡbāg ⁶⁰)	ベルシア語のカーフのファトゥハ、ジームのスクーン、パー、アリフ、ベルシア語のカーフのスクーン	1 から 5 ルピー
盾 (sipar ⁶¹)		1 から 50 ルピー
ダール (dhāl ⁶²)	ヒンド語のダールと隠れたハー ⁶³ のファトゥハ、アリフ、ラームのスクーン	1/2 ルピー から 4 ムフル
ケーラー (khērah ⁶⁴)	カーフと隠れたハーのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラーのファトゥハ、書かれただけのハー	1 ルピー から 4 ムフル
パリー (phari ⁶⁵)	ベルシア語のパーと隠れたハーのファトゥハ、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1 ルピー から 1 ムフル

の魚の背骨、あるいは同様の形に鋼で作られた武器を指す [Haider 1991: 228]。英語訳の図では (37) で、Haider の説明する形状のものが示されている [AA (Etr.) : I, xxiv, pl. XIII]。(W)

59 ヒンディー語では他に、gōphanā, gōphanī, gōphiyā とも言う [Platts 1884: 922a; 古賀・高橋 2006: 362b]。その形状は定かでないが、英語訳の図では弓のような形をした武器 (38) がこれに当てられている [AA (Etr.) : I, xxiv, pl. XIII]。(W)

60 ヒンディー語で象を意味する gaḡ と、頭絡、手綱を意味する bāg から成る [Platts 1884: 897b, 123b; 古賀・高橋 2006: 321b, 943a]。(W)

象を制御するために象使いが手に持って用いる道具。英語訳の図では尖った先端とかぎ爪を柄に取り付けた武器 (39) にこれが当てられている [AA (Etr.) : I, xxiv, pl. XIII]。Akbar 時代の絵画資料には、これと同じ形状の道具を手に象に座乗する Akbar の姿が散見される (例えば Victoria and Albert Museum 所蔵の Akbar Nāmah 写本の挿絵のうち「ガンジス川を渡る Akbar」[IS.2:58-1896])。(M)

61 sipar および以下に続く dhāl, khērah, phari はいずれも盾の一種であると考えられるが、具体的な形状や素材については確証がない。sipar について、Langlès は図 1 の 25 の武器を当てる一方、Egerton も英語訳も sipar の図は示さない。なお Akbar に帰される盾として、Akbar の名とヒジュラ暦 1002 (1593/4) 年の日付を備えた鋼鉄製円形の盾が Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya (旧 Prince of Wales Museum, Mumbai) に所蔵されている [Desai 2002: 197, 330-331]。(M)

62 Langlès は図 1 の (24) の武器を Dhāl との翻字とともに当てる一方、Egerton は図を示さず、英語訳の図では (41) が当てられている [AA (Etr.) : I, xxiv, pl. XIII]。(M)

63 三写本の「読み」の項目には hafi がないが [AA Ms. A: 52v; AA Ms. B: 56v; AA Ms. C: 46r]、ここでは底本に従う。(W)

64 Irvine は綴りの似た他の語彙との関係を指摘している [Irvine 1903: 78]。この武器の図は、Langlès, Egerton、英語訳のいずれも示していない。(M)

65 英語訳がこれを籐製の盾であると説明する一方、Irvine は籐製あるいは竹製であるとする [AA (Etr.) : I, xxiv; Irvine 1903: 78]。これについての図は、Langlès は図 1 の

ウダーナー (udānah ⁶⁶)	ハムザのダンマ、ヒンド語のダール、アリフ、ヌーンのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2から5ルピー
ドゥブルガー (dubulḡah ⁶⁷)		1/2ルピーから3 1/2ムフル
コーギー (khōghi ⁶⁸)	カーフと隠れたハーのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、ペルシア語のカーフと隠れたハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1から4ルピー
鎖付き兜 (zirih kulāh)		1から5ルピー
グーグワー (ghūghuwah ⁶⁹)	ペルシア語のカーフと隠れたハーのダンマ、ワーウのスクーン、ペルシア語のカーフと隠れたハーのダンマ、ワーウのファトゥハ、書かれただけのハー	1ルピーから2ムフル

(26)、Egerton は (6)、英語訳は (42) である [AA: I, xxiv, pl. XIII]。(M)

ヒンディー語で *phari* は、A shield, buckler (esp. a small leather shield used in fencing)、また「木刀の技を競う際に防具として用いられる革製の盾」を意味する [Platts 1884: 286a; 古賀・高橋 2006: 890a]。Haider は 13 世紀にイランから伝わったカルカン盾のことを指す名称であるとする。籐製で、表面に絹糸で同心円状のカラフルな模様を編み込まれ、持ち手のついた小さな金属板が中央に付いていて、縁は金属や革で補強されているという [Haider 1991: 219]。Victoria & Albert Museum に現存する 17 世紀の *phari* の一例とされる盾がある (Acc. No. 571-1884)。(W)

66 従来の研究では説明されておらず、詳細は不明である。ただし Langlès は図 1 の (28) にあたる形状の武器に *Adhānēh* との翻字を与え、同じ形状の武器を Egerton は自らの図の 5 番に示し、*Uḡānah* との翻字のみを与えている。(M)

67 テュルク語で「冑、ヘルメット」を意味する *dubulḡah* であろう。この語には他に *dāvulḡā*, *dāvulḡān*, *dülūḡah* といった綴りもある [Pavet de Courteille 1870: 317, 322]。 *Bābur Nāmah* には *dubulḡah*, *dūvulḡah*, あるいは *dülḡah* の形で見られる [BN: 97, 160, 161, 311, 370]。Doerfer によれば、この語はモンゴル語に由来し、テュルク語を経由してペルシア語では *dulḡah* で冑を意味する語として知られるようになったのだらうとされる [Doerfer 1963-1975: IV, 285]。(W)

Pant もヘルメットの一種と見ている [Pant 1983: 55-56]。1573 年 9 月、*Guḡarāt* 遠征の軍中で、いったん脱いで随臣に預けてあった御用の *dubulḡah* を Akbar が召し出したところ、「*dubulḡah* の *piš-bin-i*」が外れていたのを、「前方が開ける吉兆」と戦勝を予見したことが *Akbar Nāmah* に伝わる [AN: III, 53]。 *piš-bin-i* はヘルメットである *dubulḡah* に付属して「目の前」にあること、これがなくても *dubulḡah* が機能を果たすことを考慮すると、眉庇を指すかと思われるが、Blochmann は「鼻当て *nose-front*」と解している [AN (Etr.): III, 76, n. 2]。(M)

68 従来の研究では説明されておらず、詳細は不明である。(M)

69 英語訳は、頭と胴に用いる一体の鎖帷子との解説を付し、図では顔面のみが露出する恰好とおぼしき武器 (44) にこれを当てている [AA (Etr.): I, xxiv]。一方 Langlès は *Khok'houah* との翻字で、全く異なる形状の武器の図 (図 2 の (29)) にこれを当て、

胴鎧 (ġibah ⁷⁰)		20ルピーから30ムフル
鎖防具 (zirih ⁷¹)		1 3/4ルピーから100ムフル
バグタル (bagtar ⁷²)		4ルピーから12ムフル
ジャウシャン (ġawšan ⁷³)		4ルピーから9ムフル

- Egertonは同じ形状の武具 (4) に、G'hug'hwahとの翻字と頭と胴に用いる一体の鎖帷子との解説を与えている。Irvineは図像の形状が英語訳とEgertonとで大きく異なることを指摘しているが、その使用法もふくめ解決は示していない [Irvine 1903: 70]。(M)
- 70 底本の母音記号ではġaybahだが、三写本には母音記号が付されていない [AA Ms. A: 52v; AA Ms. B: 56v; AA Ms. C: 46r]。モンゴル語に由来し、ġibā, ġibāとも綴られる。モンゴル語では武器一般の意味であったが、やがて胴体を守る鎧を指すようになった [Doerfer (1963-1975): I, 284-286]。Bābur Nāmahにも頻出する [BN: 196, 307, 311, 340, 356, 362, 374, 468, 501, 597] (W)
- 71 鎖帷子あるいは鎖で作られた具足一般を指す。Haiderによると、腰丈から膝丈、あるいは脛脛までの様々な長さのものがあり、丈が長いものは騎乗しやすいうように前後にスリットが入っている。また一般に肘までの袖が付いている。薄手のキルトのアンギルカ (注76参照) またはカバー ([AA (Jtr.) (7): 30, n. 12] 参照) の上に着用する [Haider 1991: 96-99]。現存するムガル帝国時代の鎖帷子の例として、Metropolitan Museum of Artが所蔵する金属板付きのものがある (Acc. No. 2008.245)。これについては、ヒジュラ暦1042 (1632/33) 年にŠāh Ġahānがその臣下Sayf Ġhānから贈られたものであることが金属板の裏の刻文から確認できる。この金属板については、より古い鎖帷子に17世紀になってから取り付けられた可能性もあるが、その確証は未だ得られていないこと、および金属板の表面に記されたクルアーンの章句および裏面の刻文の詳細については、[Alexander, Pyhrr & Kwiatkowski 2015: 43-45]。(W)
- 1632/3年のŠāh Ġahān宮廷におけるSayf Ġhānとは、当時Ilāhābād州総督だったSayf Ġhān以外にはあり得ない。Šāh Ġahān政権成立に至る党争の中で失脚したあと、王妃Mumtāz Maḥalの取りなしでマンサブ4000/4000の地位を回復し、Bihār州総督を経て同職にあった [BNL: I, 177, 228, 426]。この人物の、ヒジュラ暦1042年における行動については記録が無いが、翌1043年Šafar月18日 (1633年8月24日) に「宝石ちりばめた用具、金の用具その他の物品」を献上したとの記録はある [BNL: I, 536]。前年ヒジュラ暦1042年末までに完成していた上記の具足が、翌年の第2月であるこの機会に君主に献上された可能性はある。(M)
- 72 胴鎧の一種。薄い鉄板をいくつか繋いだもので、ピロードや錦などがそれに縫い付けられている [Dihḥdā: bagtar]。Farhang-i Rašīdiでも「戦時に着る衣。時にピロードで作られ、その上に複数の鉄片を付す」とあり、薄片鎧の一種と考えられる [FR: I, 162]。Irvineは英語訳の図版の(47)がバグタルであるとするが、Haiderはこの図をバグタルの上にチャハール・アーイーナ (注74参照) を重ねて着けたものと考えているようである [Irvine 1903: 66; Haider 1991: 92]。(W)
- 73 鎖帷子の一種 [Zenker 1866-76: I, 373a]。Bābur Nāmahにも言及され、鎖かたびら、

チャハール・アーイーナ (<i>čahār ā'inah</i> ⁷⁴)		2ルピーから7ムフル
コーティー (<i>kōthī</i> ⁷⁵)	カーフのオー発音ダンマ、ワーウのスクールン、ヒンド語の上双点付きターと隠れたハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	5ルピーから8ムフル
サーディキー (<i>šādīqī</i>)		3ルピーから8ムフル
アングルカ (<i>angirkha</i> ⁷⁶)	ハムザのファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフのカスラ、ラーのスクーン、カーフと隠れたハーのファトゥハ	1 1/2ルピーから5ムフル

coats-of-mailと訳されている [BN: 193; BN (Jtr.) : 194; BN (Etr.) : 195]。一方Haiderによると、カバーチャ(丈の短いカバー [AA (Jtr.) (7) : 30, n. 12])の上の方形の金属板が縫い付けられた長袖、腰丈の防具であるとされ [Haider 1991: 92]、これに従えば薄片鎧の一種を指すと思われる。Pantによると、正面を覆うように1枚または2枚組の金属板が取り付けられており、金属板の形状は円形、正方形、長方形の3種類が見られた。また、方形の金属板はBāburの兵士の間ではそれほど一般的ではなかったが、後にはより広く見られるようになったという [Pant 1989: 115, 145 n. 47]。(W)

⁷⁴ 字義は「4つの鏡」。鏡のように磨かれた4枚の金属板から成る、胸部を覆う鎧の一種 [Anwarī 1381Sh.: III, 2413b-2414a]。Haiderによると、方形の金属板4枚が革紐で一体になっており、体側を覆う2枚は胸部と背面の2枚より小さい。zirihに固定するか紐で結んでその上に着用するという [Haider 1991: 92]。Irvineは、本書の英語訳所収の図 (pl. XIII) の (49) であるとする [Irvine 1903: 67]。Virginia Museum of Fine Artsに18世紀北インドの*čahār ā'inah*とされる4枚組の金属板が所蔵されている (Object No. 90.119.1-4)。(W)

⁷⁵ Haiderによると、一般には特別な処置を施した革で作られた長衣で、胸部に大きな金属板が1枚、またその他の胴体部分に様々な大きさ、形状の金属板が左右対称に配されたものを指す。また、デリー・スルターン朝時代に“*baqhltaq*”と呼ばれていたものがムガル時代にはコーティーとして知られるようになったと述べる [Haider 1991: 117-118]。ただし、Doerferによれば、テュルク語の*bağiltāq*は甲冑の下に着るキルトの衣服を指す [Doerfer (1963-1975) : II, 297]。また*Farhang-i Ġāhāngiri*では*tāq*として見られ、*bağtāq*あるいは*bağltāq*とも言い、フェルジー (前開きの衣、AA (Jtr.) (7) : 30-31, n. 13参照) のことを指すとされる [FJ: III, 546-547]。以上のことから、金属板の配されたコーティーが、“*baqhltaq*”と同じとするHaiderの見解はなお根拠薄弱と言わざるを得ない。Irvineは、英語訳所収の図 (pl. XIV) の (50) がコーティーであるとする [Irvine 1903: 69]。(W)

⁷⁶ ヒンディー語で*angarkhā*あるいは*angarkhī* (字義はbody protector)。男性が着る長いチュニックあるいは上着 [Platts 1884: 97a]。長袖で膝下まである男子の上着の一種 [古賀・高橋 2006: 2b]。Haiderによると、ゆったりとした長衣で、左右の身頃を体の前で重ね、腕の下で紐で結んで着用する。様々な着用法があり、1) これだけを防具と

バンジュー (bhangū ⁷⁷)	バーと隠れたハーのファトゥハ、隠れたヌール、ジームのダンマ、ワーウのスクーン	3ルピーから2ムフル
鉄製鎖の顔防具 (čihrah zirih-i āhani)		1 1/2ルピーから1ムフル
カバーの鎧 (silah-i qabāy ⁷⁸)		5ルピーから8ムフル
チヒル・カド (čihil qad ⁷⁹)		5から25ルピー
籠手 (dastwānah)		1 1/2ルピーから2ムフル

して着る、2) 素肌がこすれないように他の防具の下に着る、あるいは3) 上に着ることもある。1) の場合は切っ先を逸らせるよう詰め物を多く入れて分厚くし、2) の場合はそれほど厚くない。3) の場合は、金属製の防具を見せないようにするため、あるいは強い太陽光線から守るために着るといふ [Haider 1991: 114]。Irvine は、これを “alkhāliq (a tight fitting coat)” と同じものであると述べるが、Pant によるとこの説は誤りである。また Irvine は、英語訳所収の図 (pl. XIV) の (52) と同定するが、これは身頃を重ねる形状にはなっておらず、Haider の説明とは合致しない。ただし、Pant はこの点は問題にせず、前開きで膝下丈の綿入りの長衣であるとする [Irvine 1903: 68; Pant 1989: 116]。一方、Langlès の図解では、(31) と (32) が [Anguer-Ker 上着] とされる (注27参照)。なお、衣装としての angarkha のスタイルについて、Goswamy はとりわけ ġamah との違いが明確ではなく困難であると述べる。その上で、この2語はしばしば同義の言い換え表現として使われるが、敢えて区別するならば、どちらも腰より下にフレアーが付いているのは同様だが、ġamah が左右どちらかの脇近くで紐を結んで閉じるのに対し、angarkha はより下の腰に近いところで結んで閉じるものを指して用いるという。今日 angarkha として知られるものは、一般に紐を正面で結び、胸のところを開けてその下に付けた別布が見えるような形状をしている [Goswamy 1993: 27-29, 48-86 の図版]。(W)

77 Langlès による図版では (33) に Behndjou の語が当てられ、「喉当てを備えた鎧」とされるが、その根拠は不明 (注27参照)。また、Haider は本書の英語訳の図版を見れば喉当て付きの袖なしの上着のようであるとし、Irvine は袖なしの上着ではないかと述べるが [Haider 1991: 125; Irvine 1903: 69]、いずれも論拠不十分で、具体的に何を指すのかはよくわからない。(W)

78 カバーについては、[AA (Jtr.) (7) : 30, n. 12]。(W)

79 A sort of armour のこと [Steingass 1892: 405b]。字義は「40の(革の)切れ」か。Haider によると、一種のダブレットを指し、防具の上に、またはこれだけで着用する。詰め物をした絹製か綿製の上着、あるいは縫い合わせて層状にした布地でできた “chilteh” すなわち čihil tah (字義は「40の層」、鎖帷子の一種 [Steingass 1892: 405a]) として作られた。太ももの半ば、あるいは膝までの文で、袖は肘まで、下に着けた鎧の胸部の円盤が見えるように前面が開いている。ただし、前面をボタンあるいは紐で閉じ、金属製の円盤を背中に着けたものや、腰のあたりで方形の布を前後に着けたものもあったという (なお Haider は前者を Timurid Style、後者を Central Asian Style from

ラク (rāk ⁸⁰)	ラー、アリフ、カーフのスクーン	1ルピー から10ムフル
カント・ソーパー (kañh sōbhā ⁸¹)	カーフのファトゥハ、隠れたヌーン、ヒンド語の点付きターと隠れたハーのスクーン、スイーンのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、バーと隠れたハー、アリフ	1から10ルピー
鉄のブーツ (mūzah-i āhani)		1/2から10ルピー
カジーム (kaḡim ⁸²)		50から300ルピー
カジーム覆い (artak-i kaḡim ⁸³)		4ルピーから7ムフル
馬用兜 (qašqah ⁸⁴)		1ルピー から2 1/2ムフル

Ninth-Tenth Century A.D.とする)。16-17世紀のムガル絵画に多く見られ、おそらく兵士はこれだけを身に着けていたのではないかと Haider は推察する [Haider 1991: 117]。Irvine は英語訳所収の図 (pl. XIV) の (54) であるとする [Irvine 1903: 69]。(W)

以上、各種の胴鎧に関する叙述にはない用語 *pīrahan* (「胴着」の意) を刻され、ヒジュラ暦 989 (1581/2) 年の日付を備えた Akbar の胴鎧が Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya (旧 Prince of Wales Museum, Mumbai) に所蔵されている [Desai 2002: 196, 330]。残念ながらこの「胴着」が本書で叙述される武器のいずれに当たるか、当たらないかは判然としない。(M)

80 Irvine は本書に見られる *rāk* (または *rāg*) では意味をなさないとして、*Dastūr al-'Amal* の写本に見られる字形に基づき *rānak*、すなわち *rān* (太もも) の指小辞であろうとの推察を示し、そのうえで脛あて鎧を指すと解する [Irvine 1903: 71]。Pant や Haider もこの解釈に従っているようだが [Pant 1970: 170; Haider 1991: 135]、Irvine が参照した写本は特定できず、この説の当否は判断できない。(W)

81 *kañh* はヒンディー語で首や喉、*sōbhā* は美や装飾を意味する [古賀・高橋 2006: 176b; Platts 1884: 693a, 851b]。Langlès は図2の (30) にあたる形状の武器を *Kantah-Soubhā* として「首当て」との語釈を与える (注27参照)。(W)

82 *Farhang-i Ġāhāngiri* によると、*kaḡim* または *kaḡin* は内側にかま糸 (*kaḡ*) が詰められた鎧 (*bargustān*, *bargustwān*) の別称で、人間用と馬用のいずれも指すことがある [FJ: I, 715, 860]。ただし、後出する馬の装具 (*raḥt*) に関する一節では、*kaḡim* は見えない。また、本表に後続する「覆い」*artak* は言及されているが、*qašqah* と *gardani* は言及されていない [AA: I, 142-143]。(W)

83 Pant によると、馬用の主な防具を指す。金属のプレートが所々にはめ込まれた一種のキルトでできており、馬の肩から尾までを背中側からすっぽりと覆う形状をしているという [Pant 1989: 137-138]。*artak* はテュルク語の *örtüg* に由来するか。後者にはもともと広く *covering* の意味がある [Clauson 1972: 205b-206a]。(W)

84 馬の額の白いぶち、あるいは額に白いぶちのある(馬)を意味する。*qāšqah*, *qāšqah*, *qāšqā* の形も見られる [Doerfer 1963-1975: III, 478]。Clauson においても、テュルク語の原義は動物の場合 “with a white head and darker body”、あるいは “with a white blaze

首防具 (gardani ⁸⁵)		1ルピーから1ムフル
銃 (bundūq)		1/2ルピーから1ムフル
バーン (bān ⁸⁶)	バー、ア Rif、ヌーンのスクーン	2 1/2から4ルピー

on the forehead”であり、ここから転じて上記の馬の頭につける武具の意になると説明される [Clauson 1972: 671b-672a]。Bābur Nāmahにも qāšqah としてあらわれ、「額の白い馬」、「a horse with a starred forehead」と訳されている [BN: 157; BN (Jtr.) : 164; BN (Etr.) : 163]。一方で Farhang-i Gāhāngiri によると、sari と呼ばれる戦時に馬の頭を保護するために着ける鉄製の防具を指してテュルク語で qašqah と呼んだとされ [FJ: I, 1037]、本表ではこちらを指すと考えられる。Pant によると、qašqah は馬の頭を保護するための一種の兜であり、額より上を守る小さめの帽子のようなものであるという [Pant 1989: 131, 133]。以上を踏まえ、ここでは馬用兜と訳した。(W)

さらに転じてヒンドゥー教徒が額に付けるビンディーが qašqah と呼ばれたことについてはムガル帝国時代の文献に用例が散見される。例えば [MT: II, 260, 261; JN (A) : 34; JN (T) : 42; MAI: 176]。(M)

85 馬の首に取り付けられる覆いであり、革で覆った木製である [Dihjudā: gardani]。Blochmann はその材質を鉄板としている [AA (Etr.) : I, 119, n. 2]。一方、Pant によれば綿のキルトを基層に、金属板を縫い合わせたものであるという [Pant 1997: 20, 22]。(M)

86 火薬を詰めた鉄の筒を木製ないし竹製の軸に取り付けたロケット状の武器。南アジアにおいては、(tir-i) hawāī などと呼ばれるロケットが14世紀後半から武器として用いられており、中国で開発されたものがモンゴル時代に南アジアにもたらされたと考えられている。Khan によると、15世紀後半から16世紀にロケットが武器として広く用いられるようになり、bān という呼称がよく見られるようになるのは16世紀で、16世紀末からはロケット状の武器一般が bān と呼ばれるようになったという。Habib は、サンスクリット文献に基づく Gode の研究をもとに bān は中国から直接デカンに入ったと論じ、AA のこの箇所では bān がインド語とみなされて読み方が示されていることをその証左としている。Khan はこの議論を受けて、ロケットを武器として用いる発想や bān という呼称も中国からデカンに入り南アジアに広まった可能性があるとしている。これらの議論の論拠とされている Gode の研究は、1443年から1518年の間の旅行記、15-18世紀のサンスクリット語文献、マラーター語文献などを用い、花火 (fireworks) の製造は1400年頃に中国から伝わったと推察している。ただ、インドの文献で bān が登場する一番早い事例が1400年から1500年の間に成立したとみられるサンスクリット語作品 Ākāśabhairava-Kalpa (Tanjore Manuscript Library 所蔵) であり、中国からデカンに直接 bān が入ったという仮説の論拠としてはやや脆弱である。なお、Gode は bān をサンスクリット語ではないと推察しており、その語源は未詳である [Gode 1960: 44-45, 50; Habib 1980: 31-33, Khan 2004: 23, 26, 30, 36 n. 26, 191]。(N)

砲 (tūp) の規則⁸⁷

【砲は】世界保持者のめでたき館にとっての驚くべき錠であり、諸国征服者の門にとっての心開く鍵である。この統治の元手は、この永久の王朝の中におい

87 南アジアにおいて、火砲は15世紀から利用されていた。14世紀後半のデカンで火砲が利用されていたという説もあるが、その根拠とされるGIの記述について検討したKhanは、当該の記述は火砲ではなく火薬を用いた武器の存在を示すものと結論づけている [Khan 1981: 155-158]。南アジアにおいて、最初に火砲や銃を利用して軍事的な優位を得たのはポルトガル人であり、インド側の諸勢力は、14世紀末からのポルトガル勢力の活動を通して火器の有用性を認識したとされる [Elgood 1995: 132]。Khanは、南アジアの諸勢力による火砲や銃の利用の初期の事例として、マールワールのMaḥmūd ḤalḡīによるMandalgarh攻略(1456年)におけるtūpの利用を挙げている [GI: II, 251; TA: III, 339]。その他の地域においては、カシミールのZayn al-Ābidīn治世(1422-72年)におけるḤabībという技師(ātišbāzi)によるtufangの導入 [GI: II, 344; TA: III, 439]、グジャラートのMaḥmūd Bēgaraによるキャンベイ湾での海賊討伐(877-878/1472-3年)におけるtufangの利用とĀmpānēr攻略(1484-5年)におけるtūpの利用 [GI: II, 202; MS: 129; TA: III, 161]、デカンのSulṭān Muḥammad Ṣāh Bahmanīによるヴィジャヤナガルへの遠征(1472-73年)におけるtūpとḍarb-zan、tufangの利用 [BM: 113; GI: I, 355]などが初期の火器利用の事例とされる。北インドにおいては、15世紀後半にはティムール朝下の中央アジアから導入された火砲が用いられるようになっており、Sikandar Lōdī時代(1489-1517)に制作された絵画に火砲が描かれているという [Khan 1981: 159-164; Khan 2004: 41-44]。ただし、Gommansはこれらの史料の記述について疑問を呈している [Gommans 2002: 146, 229 n. 52]。また、Eatonは、南アジアにおいて火器が重要な役割を持った戦闘の早い時期の例として、1520年のRaiḍūrの戦いを取り上げている。この戦いはRaiḍūr城砦を主戦場としてアーディル・シャーヒー朝とヴィジャヤナガル王国が対決し、後者が勝利した。Eatonは、この戦いにおいてアーディル・シャーヒー朝が野戦に携行した大量の火器や城砦の防衛に用いた火砲が有効に機能しなかった一方、ヴィジャヤナガル王国が雇ったポルトガル人傭兵の銃部隊は大きな成果を上げたと論じる [Eaton 2009: 302-305]。16世紀のデカンにおける火砲製造・運用技術や城砦建築の発展については [Eaton and Wagoner 2014; Sohoni 2015: 115-121]を参照。なお、南アジアにおける火砲や銃の製造について、ムガル帝国以前の北インドの状況は詳らかではない。デカンにおいては、1510年にポルトガルがゴアを征服した際に、同地のアーディル・シャーヒー朝の工房で火砲が製造されていた形跡があったという記録をGaspar Correiaが残している。16世紀初頭のデカンにおいては、高い水準で火砲や銃を製造できるムスリム技師の存在が認められる。また、火器の製造にはヨーロッパ人やオスマン朝出身者も利用されていた。イタリア人旅行者Varthemaは、1506年のカリカットにおいて当地の支配者に仕えて多くの大砲を作ったイタリア人と会ったという記録を残しており、1508年には「ルーム人」(注88参照)がゴアでアーディル・シャーヒー朝に雇用されたという記録もあるという [Eaton 2009: 298; Eaton and Wagoner 2014: 14-15, 47; Elgood 1995: 132; Gommans 2002: 147; Varthema: 260-262]。(N)

て、ルームの国⁸⁸以外にあり得ないほどの豊富さによって際立っている。いくつかのカマーンは⁸⁹、弾丸が12マンの重さで、数頭の象と数千頭の牛で運ぶほど

88 Rūmīstān. この場合はオスマン朝の支配領域を意味する。南アジアでの火器の発展において、オスマン朝由来の火器や技術者の例が多く見られることは夙に知られている。「ニュルンベルク式火縄銃」がオスマン朝に伝播して「ルーム銃」へと進化したものが西アジア・インド洋方面に広がり、ポルトガル人の来航以前に南アジアに到達していたことについては [中島 2013: 108-109]。また1527年、Bābur軍が Rānā Sangā 軍を撃破した Kānwā の戦いで採用した銃兵隊・砲兵隊の布陣が「ルーム方式」であり、これを指揮したのは「ルーミー Rūmī」との帰属表示 (ニスバ) を有する Muṣṭafā なる人物であった [BN: 501, 516, 539; BN (Jtr.): 495, 509, 533]。1540年、Humāyūn が Šīr Hān と戦った Qanawğ の戦いには、砲兵隊の指揮官のなかに Muḥammad Hān Rūmī, Ustād Aḥmad Rūmī が見える [TR: 682]。一方、インド西岸部で16世紀初頭に「ルーム人」が活動していたことは、この地域を旅した Varthema が Guḡarāt 地方の港市 Diw を「Diuobandierrumi すなわちトルコ人たちの港 Diuo」と説明していることからうかがえる。それによると「400人のトルコ人商人」が居留しているこの港市には「多数の大砲」が備えられていたという [Varthema: 91-92]。16世紀前半にインド洋西部で活動したマムルーク朝海軍およびその後のオスマン朝海軍も南アジアへの火器の伝播に大きく関与している。Guḡarāt 地方アフマド・シャーヒー朝君主 Sulṭān Bahādur (在位1526-1537) は「外国人」ḡarīb-ān を積極的に登用し、ギーラーン人、アラブ人、ハバシュ人と並んで「ルーム人」がその配下に参集していたという。とりわけルーム人の中では「銃砲を満載した船200隻」を率いて渡海してきた「ルーミーのパシャ」とその ḡulam たる Ḥwāḡah Šafar、攻城術に精通した Rūmī Hān らがいた [TSG: 61-62]。この Rūmī Hān と同一人物の可能性があるので、1531年1月、ポルトガル艦隊を迎え撃つ港市 Diw 沖に、オスマン海軍艦艇を率いてイエメンから亡命してきた Mustafa なる提督である。ポルトガル語史料は、この海戦における勝利に寄与したこの提督に Sulṭān Bahādur が “Rumecão” の称号を与えたと伝える [Castanheda: VIII, 253]。その亡命の経緯については [真下 1995: 721, 738-739 n. 27]。この Rūmī Hān がもたらした火砲は、後に陸揚げされ、1532年11月から1533年3月までにわたった、Sulṭān Bahādur による Čitōr 城砦攻城戦に投入された。その砲撃を指揮したのも Rūmī Hān なる人物である [MS: 290-293]。オスマン朝海軍のもたらした火器が、南アジアの陸上戦の火力として運用された一例である。1554年、Guḡarāt 地方に漂着した Seydī ‘Alī Ra’īs 指揮下のオスマン朝艦隊も、帰航の望みを捨てて解体した艦船の火砲その他の装備を Daman および Sūrāt に残した [MM: 27; Bacqué-Grammont 2007/2008]。ただし「ルーミー」のニスバが即「オスマン朝領域出身」を意味したとは限らない可能性もある。例えば少年 Akbar に銃の射撃を教えた Ustād ‘Azīz Sīstānī は「火器と銃撃の技能の数々」を備えた人物であり、Sīstānī というイランの一地方にかかわる帰属表示にもかかわらず、Rūmī Hān の称号を得ていた [AN: I, 355]。さらに南アジアでは砲兵隊長がなべて Rūmī Hān を名乗る傾向があったことにも留意する必要がある (例えば1563年ごろ Kābul で砲兵隊長をつとめた Abū al-Ma’ālī [AN: II, 188] や、1565年いわゆるターリーコータの戦いでヴィジャヤナガル軍を破ったデカン諸王朝連合軍の砲兵隊長 Rūmī Hān [G: II, 76])。 (M)

89 Kamān は火薬を用いない弓を指す場合が多いが、ここでは kamān のみで火砲を指していると考えられる (注38参照)。Khan は15世紀の Guḡarāt 地方では kamān-i ra’d という語が銃 (handgun) も指しえたと考えているが、根拠とされている研究が未確認であるた

の大きさである⁹⁰。世界征服者にして世界の主人たる御方は、この業務の進展を有意義な目標の一つとみなし、多くの関心を傾けている。そして、忠勤のダルガたち、深遠なる洞察を備えた書記たちを任じ、業務通曉という糸を二重にした。

【アクバルは】様々な発明を行い、世界の人々は大いに驚いた。【その中の】一つは実用に供されている。行軍の際には分解されて簡単に運ぶことができ、射撃の際には適切に組み立てられるものである。また、17挺を一つの火縄で全て発射できるように組み合わせた【ものもある】⁹¹。1頭の象で簡単に運べるように

めこの説の妥当性については判断できない [Khan 2004: 42-44]。なお、底本では *kamān-hā* にエザーフエが付されているが、参照した三写本のいずれにも付されていないので、写本に従った構文で翻訳した [AA Ms. A: 54v; AA Ms. B: 58r; AA Ms. C: 47v]。(N)

⁹⁰ *Akbar Nāmāh* によれば、Rantanbhor 城砦の攻囲戦に投入されたのは「大型の火砲複数」*ḍarb-zan-hā-yi buzurg* であったという。その各一門は「平らな地面の上でさえ牛 200 対と起重機 1000 台をもってしても牽引するのが難しいほどのものであり、60 man の石と 30 man の合金製の弾丸 (*ḡulūlah-i haft-ḡūš*) を装填できる」ものであったとされる。*Akbar* の攻囲軍はこれらを、砦に向かい合う高地に運び上げて砲撃を行った [AN: II, 337]。その記事を画像化した *Victoria and Albert Museum* 写本の挿絵 (Acc. No. IS.2:72-1896) では、輓でつながれた牛の二頭立て複数対が火砲を乗せた四輪の砲車を牽引する様子が描かれているが、これがその「大型の火砲」にあたるのなら、テキストの所伝と挿絵の描写はずいぶん違うことになる。なお 60 man を *Akbar* 時代の基準 (1 man-i *Akbari* はおよそ 25 kg [AA (Jtr.) (1) : 110-112, n.70]) に則して換算すれば 1500 kg となり、仮に比重 3 の岩石を用いた球形の弾丸とすれば、その直径は約 100 cm となる。これが火器の実用に適うか否か注釈者には判断できないが、上記の挿絵で城砦に対する砲撃に用いられている火砲の規模は、これとは全く異なる。なお同一口径の砲身に 30 man の合金製弾丸が装填されたとすると、弾丸のこの重量と素材の比重とを考慮すれば、Khan は、合金製弾丸は中空ではなかったかと考えている [Khan 2004: 112]。但しこの攻囲戦に関する MT の叙述では、配備された火砲 (*ḍarb-zang* [sic.] *ḍarb-zan-ak* か?) に装填された砲弾は 5 man ないし 7 man であったと伝えている [MT: II, 107]。ことによると AN の記事は「異教徒」に対する「聖戦」の文飾に過ぎず、実態に近いのは MT の方かも知れない。(M)

⁹¹ *Alvi & Rahman* は、*Faḥ Allāh Širāzi* が発明品を披露したという MT の記録や彼の発明に関する TA の記述から、ここで挙げられている組み立て式の砲と、複数の砲を一つの火縄で発射する仕組みの発明を *Faḥ Allāh Širāzi* に帰している。ただし、TA の記述をこの二つの発明品に明確に結びつくと考えるのは難しい (注 112 参照)。なお、*Alvi & Rahman* は *Faḥ Allāh Širāzi* が発明品を披露した年を 1584 年としているが、これは 991/1583 年の誤りである。AN には、991/1583 年に *Faḥ Allāh Širāzi* がデカンからアクバル宮廷に参上したとの記録が見え、MT に記録されている彼の発明品の披露は、新参者である *Faḥ Allāh Širāzi* の技能を示すために行われたものと考えられる [AN: III, 401; MT: II, 321; TA: II, 457; *Alvi & Rahman* 1968: 9-10, 30-32]。(N)

したのもあり、これはガジュナール (*gaḡ-nāl*⁹²) (ペルシア語のカーフのファトゥハ、ジームのスクーン、ヌーン、アリフ、ラーム) と名付けられた。あるものは一人で持ち上げて運ぶことができ、それはナルナール (*nar-nāl*⁹³) (ヌーンのファトゥハ、ラーのスクーン) と呼ばれる。【砲】適切に支配領域に分配され、各州に相応しい形でそこに保管される。〈I, 125〉また、砦での戦闘や船での戦いのために分解され、勝利の親軍に相応しく運搬される。

それぞれを数え上げると語りきれない。というのも、傑出した腕前を備えた匠たちが、ガジュナールとナルナールのような新たなものを常に生み出しているのだから。

92 *gaḡ* はヒンディー語で象、*nāl* は筒を意味する。1577-78年のOrčhah遠征の際にムガル軍が*gaḡ-nāl*を用いたという記録がある [AN: III, 230]。Chester Beatty Library と Victoria and Albert Museum 所蔵の *Akbar Nāmah* 挿絵の中では、1561年の Gomti 河畔の戦いにおいて小型の砲が兵士に抱えられていたり船に寄せられていたりする様子が描かれているほか (Acc. No. IS.2:13-1896)、1568年の Čitor 攻略 (Object No. In 03.133, Acc. No. IS.2:66-1896, Acc. No. IS.2:69-1896)、1569年の Ranthanbhor 攻略 (Acc. No. IS.2:73-1896; Acc. No. IS.2:74-1896)、1576年の Dunārā 攻略 (Object No. In 03.227) の様子を描いたものには、筒型や湾曲したものなど数種類の小型の砲が描かれているが、それらの挿絵に対応する *Akbar Nāmah* の文章中では *gaḡ-nāl* や *nar-nāl* への言及はない [AA: II, 138-139, 313-342, III, 167-168]。なお、技術発展の結果、17世紀には *gaḡ-nāl* や *nar-nāl* に代わって “shaturnāl” (*šutur-nāl*、ラクダ筒) という砲が見られるようになり、機動性の高さから広く用いられるようになったという。18世紀のオスマン帝国で火砲をラクダに吊るして運んでいた様子がイタリアの博物学者 Marsigli の *Stato Militare dell’Imperio Ottomano* に収録されている [Elgood 1995: 137-139; Gommans 2002: 128; Khan 2004: 94, 98, 103, 193]。 (N)

Khan の説明のごとく、17世紀に *gaḡ-nāl* / *nar-nāl* から *šutur-nāl* への交替が進んだとすると、1608年、メーワール地方に対する遠征軍に付属した砲兵隊 (*tūp-hānah*) が、70-80門の火砲 (*tūp*)、*gaḡ-nāl*、*šutur-nāl* を擁していたことは、そのような交替の過渡期に両者が併用されたことの反映と考えられる [JN (T): 83; JN (A): 69]。Chester Beatty Library 所蔵の *Akbar Nāmah* 写本の挿絵には、1573年、Guḡarāt で反乱した Muḡammad Ḥusayn Mirzā を追撃する Akbar 軍の象部隊に属する一頭の象の背に据えられた輿に装備された火器が描き込まれている (Chester Beatty Library, ms. In03, f. 187v)。Khan はこれが *gaḡ-nāl* と見ている (Khan はこの写本の参照を f. 178 としているが誤り) [Khan 2004: 99, fig. 15; 117, n. 16]。Khan は別の形状の *gaḡ-nāl* を描いた Akbar 時代の絵画として、Datta が紹介した Jaipur の *Razm Nāmah* 写本の挿絵を例示して *gaḡ-nāl* の形状が多様であったと説明するが [Khan 2004: 94]、この挿絵も Datta の研究論文も参照できなかったため、その説の当否は判断できない。 (M)

93 *nar* はヒンディー語で人・男性を意味する。ムガル帝国時代の事例については注92を参照。 (N)

アミールたちやアハディーたちがこの重大な業務において月給を得ている。歩兵の手当は400ダームから100ダームまでである。

銃 (bundūq) の規則

君主はこれに大いに心を傾けておられ、その製造と射撃において時代の第一人者のお一人である⁹⁴。弾薬をいっぱい詰めて火を点けても破裂しないようなものが製造されている。以前は、【弾薬は】4分の1以上は詰められなかった。また、大槌と金床で鉄の板を作り、両側から【丸めて】平らな板の縁同士を繋げていた。あるいは深い見識を持つ者の一部は片方【の縁】を上重ねていた。ただ、特に前者については多くの損傷が発生していたので、世界の王たるお方は、選りすぐりのやり方を編み出した。鉄の板を、一卷きごとに長くなるように螺旋状に巻き上げ、縁同士は接するのではなく互いに重なるようにして、徐々に炎で熱して仕上げる⁹⁵。また、鉄の塊を熱し、棒を差し込んで孔を開けたものを、三つか四つ繋げる。小さい銃なら多くの場合、二つである。長さは2ガズほどになり、小さいものなら1 ¼ガズである。これをダマーナク (damānak⁹⁶) (ダールのファトゥハ、ミームとアリフ、ヌーンのファトゥハ、カーフのスクーン) と呼ぶ。銃床 (qundāq) は別の工程で製造される。また、国の王たるお方の御見識から、火縄なしで、引き金のわずかな動きによって着火し、弾丸を放つことができるような工夫もなされた⁹⁷。太刀のような働きをするように製造

94 Akbarが銃の射撃を初めて体験したのは、1555年末ごろ、師傅Bayram Hānとともに Hiṣār-i Firūzahに滞在していたときのことである [AN: I, 355-356]。少年Akbarが銃を構える様子を写し取った挿絵を備えたAkbar Nāmāh写本が大英図書館に所蔵されている (British Library, Or. 12988, f. 158r)。 (M)

95 Metropolitan Museum of Artに所蔵されている、18世紀末から19世紀に作られた銃の一つは、本文中に説明されているような方法で金属を巻いて銃身が作られたと推察されている (Accession Number 36.25.2153) [Alexander, Pyhrr & Kwiatkowski 2015: 279]。 (N)

96 ダマーナクは、ペルシア語で銃身 (carbine) を意味する [Khan 2004: 60; Steingass 1892: 535a]。 (N)

97 この時代の銃の点火方法には、火縄を用いるマッチロック式 (match-lock) と、トリ

されている弾丸も多い。帝王の見識の輝きによって、ウスタード・カビールとフサイン⁹⁸を始め、多くの匠が顔を焔めかせた。

鉄は熱された結果、半分に減る⁹⁹。銃の長さになったら、銃尾(tah)を付けずに二つの値¹⁰⁰が刻印され、その数値の段階に応じて記号が付される。この状態のものは「ダウル(dawl)」¹⁰¹(ヒンド語のダールのファトゥハ、ワーウのスクーン、ラーム)と呼ばれる。この未製品がめでたき天覧に付され、幸運なる寝所における手順に委ねられ、まさにその場所に検討(tarfān¹⁰²)のために持ち込まれる。この時に弾丸の重さが決められ、その値に基づいて銃腔(šikāf)の大きさが決定される。【銃身が】長い場合、【弾丸の重さは】25ターンク¹⁰³、短い場合は15【ターンク】を超えないが、世界の主人たるお方以外に、このような重さ【の弾丸】を使う人間はほとんどいない。銃身(bargū¹⁰⁴)が仕上がると、二たび幸運なる後宮に送られて手順が再開される。上記と同様に【後宮に】持ち込まれ、至高の命令によって銃尾が付される。古い銃床に取り付けられ、3分の1の分量【の火薬】が詰められ、点火される。漏出¹⁰⁵がなく良く仕上がっていれば

ガーを引くことによって火打ち石と歯車を摩擦させるホイールロック式(wheel-lock)があった。ホイールロック式は16世紀初頭にヨーロッパで開発されたが、先行のマッチロック式に比べて構造が複雑であったため、あまり普及しなかったとされている。Khanは、この記述は、ムガル帝国においてホイールロック式の点火方法が開発されていたことを示すものと考えている [Khan 2004: 136]。(N)

98 この二人の銃工匠の名は史料には見いだせず詳細は不明である。(M)

99 中世インドの製鉄法では、鉄鉱石を熱して不純物を取り除く際には80%から50%程度が鉱滓として失われたとされる [Mahmud 1988: 39]。(N)

100 この二つの値の具体的な内容は明示されていないが、Blochmannは“the quantity of its iron and the length”と訳している [AA (Etr.): I, 120]。本訳注では、後出する「(研磨工によって磨き取られてしまう)加熱時と加熱前の重さ」(85頁)と推測した。(N)

101 dawlはウルドゥー語やヒンディー語では「姿形・型」を意味する [Platts 1884: 568b; 古賀・高橋 2006: 565a]。(N)

102 tarfānは「通訳者」を意味する。ここでは何らかの手順を指していると推察される。Blochmannはこの語を訳さず、“unintelligible word”としている [AA (Etr.): I, 120, n. 1; Steingass 1892: 295b]。(N)

103 Steingassによると約2オンス(約57 g)。ターンクについては「訳注(1)」も参照 [AA (Jtr.) (1): 91 n. 1; Steingass 1892: 277a]。(N)

104 bargūは空洞がある動物の角を意味する [Dihjudā: bargū]。テキスト後出の記述から、弾丸が通る腔を開けられた状態の銃身を指すと考えられる [Habib 1997: 140-141]。(N)

105 tarāwūš. Blochmannは“a trickling”という語釈を挙げ、何らかの術語であろうが詳細

君主の御前に運ばれ、先端を整えるように命令が下される。仕事を知るものたちが同じように【古い】銃床に取り付け、<I, 126> 試し撃ち (iyār) をする。もし弾道が曲がっていたら、【銃身を】熱して木の棒を差し込み真っ直ぐにする。そして、御前で研磨工に預けられ、彼は外側を命令に応じた図案で飾る。その後、御前に運び込まれ¹⁰⁶、銃床の木材とその形が定められる。この際に、いくつかの事柄が刻印される。加熱時と加熱前の重さ一以前の刻銘は磨き取られている一、鉄の産地、製作者、製作地、製作年月、記号である¹⁰⁷。次の段階では、未製品の一つが無作為に選ばれて仕上げの命令が出される。そして次の段階に進む。その後、銃尾が取り付けられ、引き金、込め矢と込め矢入れ (gaz wa pargaz¹⁰⁸) などが整えられる。命じられたことが適切に実行されたら、再度の試し撃ちの命令が下される。良い結果が出たら、銃は御前に運ばれ、三たび後宮に預けられる。この時には「無地 (sādah)」と呼ばれる。5発の弾丸が一緒に持ち込まれる。世界の主人たるお方は、定められている規則に則り4発を撃ち、1発添えて表に戻す。この時、銃と銃床の色が決められ、九つの色のうち一つが銃床について決められて¹⁰⁹、ふんだんな金や瑠璃で様々な模様が施される。

は不明としている [AA (Etr.) : I, 121, n. 3]。 (N)

106 テキストとB写本は pišgāh-i pardah だが、A写本とC写本の表記 pišgāh burdah を取った [AA Ms. A: 54v; AA Ms. C: 48r]。Blochmann は pišgāh-i pardah を取り「ハレム (pardah) に持ち込まれる」と解釈している [AA (Etr.) : I, 121]。しかし、*Ā'in-i Akbari* 内では、後宮の帳は pardah-sarā あるいは sarā-pardah と呼ばれ、pardah のみで後宮の意味で用いられている例はこれまで見られない [AA: I, 41, 42, 50, AA (Jtr.) (3) : 118, 120, 145]。なお、この部分の直後には、pish burdah というほぼ同様の表現も見られる。(N)

107 Khandwa の公園に展示されている大砲には、実際に製造年が刻印されたものがあるという [Khan 2004: 60]。(N)

108 込め矢 (ramrod) は前装式の銃に火薬や弾丸を詰めるために用いる棒状の道具である。pargaz については辞典類に記載が見られず、Blochmann の語釈に従った。Habib は語釈を示していない [AA (Etr.) : I, 121, n4; Habib 1997: 142]。なお、現存する南アジアのマッチロック式の銃の多くは、銃身の下部に込め矢が挿入できるような構造になっている (Victoria and Albert Museum, Acc. No. 2621 (IS), Acc. No. 2645 (IS), Acc. No. 3264 (IS); Metropolitan Museum of Art, Acc. No. 33.28.2, Acc. No. 36.25.2153)。(N)

109 実際に残っている18世紀南アジアの銃の銃床部分は、赤みがあった、あるいは黒っぽい木材を用いていることが多く、無地や、金色あるいは銀色の金属の飾りを取り付けたものがある [Elgood 1995: 141]。18世紀にラージャスタンで製作されたものには、白や褐色の彩色や浮き彫りを施された銃床もある (The Metropolitan Museum of

銃の色は単色である。この段階では「色付き (rangin)」と呼ばれる。同じ作法で、5発の弾丸とともに奥に四たび預けられる。国の主は4発を撃ち、5発目とともに表に戻す。「色付き」が10挺整ったら、銃口と銃尾を金で飾るように至高の命令が下る。仕上がったものが、以前からの規則に従って神聖なる寝所に預けられる。このようなものが10挺揃ったら下僕 (čelah-hā¹¹⁰) に託される。

Art所蔵、Acc. No. 36.25.2153; Acc. No. 33.28.2) [Alexander, Pyhrr & Kwiatkowski 2015: 275-276, 278-280]。絵画では、銃床の色には黒、赤、紺、橙、水色、灰色(銀色?) 赤茶、緑が用いられ、無地・模様付き両方が描かれている (Chester Beatty Library所蔵、Object No. In 03.202, Object No. In 03.203; Victoria and Albert Museum所蔵、Acc. No. IS.2.84-1896; Acc. No. IS.2.68-1896; Acc. No. IS.2.72-1896) [Elgood 1995: 6, 128, 140]。ただし、御用の銃 Saṅgrām が複数の絵の中で異なった色で描かれていることから(注121参照)、絵画における銃の色の選定においては実際の色だけではなく彩色のバランスが考慮されていると推察される。なお、1600年頃の絵画には、銃を袋のようなものに入れて運んでいる様子が描かれている (Victoria and Albert Museum所蔵、Acc. No. IM.249-1921)。(N)

110 čelah/ čelā は、ヒンディー語で弟子を意味する。AA中の「歩兵 (piyadagān) の規則」内の説明によると、Akbarはペルシア語で一般に下僕を意味する bandah を神の僕という意味にのみ用いるべきだと考え、宮廷内での下僕を、ヒンディー語 (Hindī zabān) で忠実な弟子を意味する čelah と呼ぶことにしたという。čelah は日当1ダームから1ルピーを支払われ、aḥadi やカールハーナの職員の一部と同じく、給与支給は parwānačah に基づくとされている [AA: I, 190, 195; AA (Etr.): I, 263-264]。一方、MTでは、Akbar が唱えた tawḥid-i ilāhī の支持者が「ヨーギーの術語 (iṣṭilāh)」に則って čelah と呼ばれたとされる [MT: II, 325]。実際に Akbar 時代に čelah と呼ばれている人物の例として、鳩の育成で知られた人物の中に、Maqbil Hān Čelah、Ḥwājah Šandal Čelah、Sikandar Čelah、Ḥwājah Bahūl (Bahlūl?) Čelah という人名が見える [AA: I, 218]。これらの人物のうち、Maqbil Hān は AN や MT で Akbar の側近 (muqarrab) の一人とされており、また、Ḥwājah Šandal Čelah が 1589 年に没した後に Akbar が墓前を訪れたという記録がある [AN: II, 190, 218, III, 558-559; MT: II, 118]。さらに、AA のマンサブダールのリスト内で、マンサブ 900 の人物の中に Šimāl Hān Čelah という人名が見える。Blochmann によると、TA では qūrčī と呼ばれているという。彼は 1564 年には Akbar の元におり、1565 年には特に親しい隨身の一人として Akbar のおじ Mu'azzam Hān 捕獲に任じられ (前述の Maqbil Hān もこの任に当たっている)、さらに 1574 年には Aḡmēr での反乱鎮圧に任じられている [AA: I, 226; AA (Etr.): 491; AN: II, 190, 218, III, 81]。Ġhāngir は JN の中で移動中の居所の設営に携わった人物を čelah と呼んでおり、Akbar 治世以降も宮中の下働きを行う者に対してこの語が用いられることがあったと推察される [JN (T): 361]。(N)

銃身作りの規則

以前は、腕っ節の強い男が鉄の道具で大変な苦勞をして、わずかな数を整えていた¹¹¹。世界を飾るお方は、明察によって、一頭の牛を周回させることで、16本の銃身をより短い時間で整えることができる回転機を發明された¹¹²。説明のために、その姿を描く¹¹³。

111 この作業を *cleaning* と解釈する Blochmann とこれに従った Alvi & Rahman に対し、Habib は *boring* (銃身に腔を穿つこと) だと解釈し、「整えていた」の部分で “*till some smoothness (ṣafā) [within the hand-gun barrel] was achieved*” と訳している [AA (Etr.) : I, 122; Alvi & Rahman 1968: 4-7, 30-31; Habib 1997: 140-141]。本文中の記述では、銃身の原型の時点で銃腔が形成されているとみられるので、この作業はその腔を「整える」ことと解釈した。(N)

112 この回転機 (*čarḥ*) の發明を本書は Akbar に帰するが、Alvi & Rahman は Fath Allāh Širāzī を發明者とし、Habib もこれと同様だが理路は異なる [Alvi & Rahman 1968: 4-7, 30-31; Habib 1997: 139-140]。「世界を飾るお方」Akbar はその帝国においてすべての新機軸の主宰者であったから、宮廷史家が新奇な機械仕掛けの發明をあえて取り上げ、これを自らのパトロンに帰した筋立てを真に受ける必要はない。従来研究の所論において鍵を握るのは *Ṭabaqāt-i Akbarī* が Fath Allāh Širāzī の發明品を列挙する中で「一つの車輪 (*čarḥ*) で12挺の銃が発射された」と述べた記事である [TA: II, 457]。Alvi & Rahman はこの一文について、この「車輪」が機能するホイールロック式の12門連装銃を記述したものだとの仮説を否定した上で、本書に既述の17門連装銃 (25ページ) と16本の銃身を扱うこの回転機を *Ṭabaqāt-i Akbarī* の著者が取り違えて合成した結果生じた誤報と解釈している。そして、合成の錯誤があったとしても、この一文は、その二つの發明品を Fath Allāh Širāzī に帰したものだとの結論に至っている [Alvi & Rahman 1968: 4-7, 30-31]。しかしこれは、その一文の「12」という数字や「車輪」の説明をすべて錯誤の結果と片付け、Fath Allāh Širāzī への付会のみをつまみ出した操作に過ぎない。一方 Habib はこの一文の「発射された」*sar mi-šawad* というくだりを「その先端が固定された」と解している [Habib 1997: 138]。Habib は Alvi & Rahman とは異なり、この回転機を銃身の穿孔機と見なすので (注111参照)、銃の数の相違を度外視して、穿孔機の機構に相応しい解釈を与えたのだろう。恣意的な読みであることは否めない。以上のことから、注91にも示されたごとく、*Ṭabaqāt-i Akbarī* の一文を17門連装銃ないし16門回転機に結びつける十分な理由はない。それゆえこの一文を介して、回転機の發明を Fath Allāh Širāzī に帰する議論には十分な根拠がないことになる。一方この一文そのものの解釈としては、Fath Allāh Širāzī に帰される車輪機構付き12門連装銃の証言ではあるものの、他の証拠の裏付けが乏しくその信憑性はなお疑わしい、とせざるを得まい。(M)

113 写本では、この回転機に該当するものと思しき図が1葉を用いて示されている。機械の構造については Habib 1997 も参照。Habib は Ms. A を参照しており、この図は実際の機械の様子に基づく可能性が高いとしている [Ms. A: 55v; Ms. B: 59r; Ms. C: 48v; Habib 1997: 141]。(N)

本訳注で参照した三写本はいずれも同様の図を含んでおり、Ms. A と Ms. B は「銃身

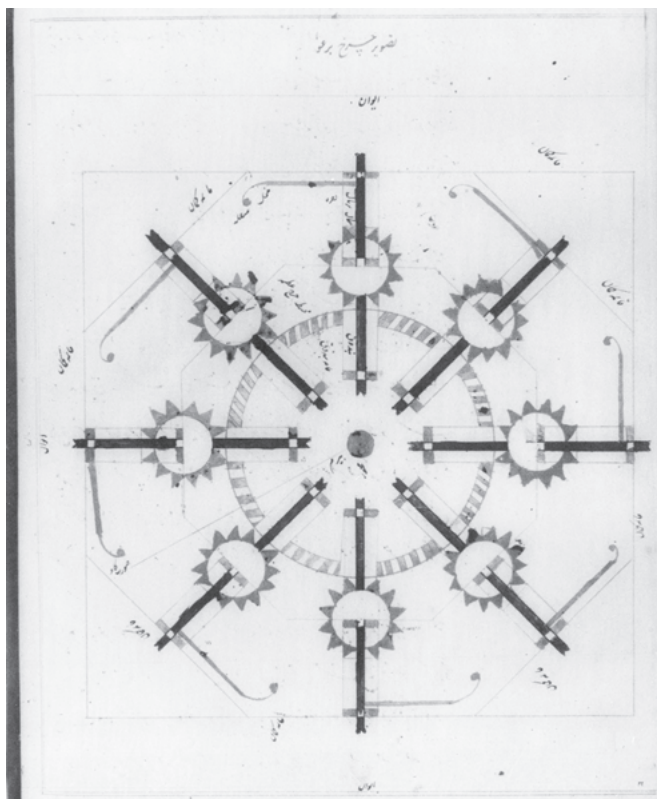


図3 ©The British Library Board. [AA Ms. A: 55v]

の回転機の図」との表題を備えている。さらにMs. Aのみ図の各部に解説とおぼしきペルシア語の注記を複数備えているが、これが原著に由来するテキストであるか否か、定かではない。その注記の全ては解読できないが、図中央の円形には「軸」*miḥwar*との注記、これから左下方に伸びた直線には「長い石材」*bayram*、その直線の先端には「牛の図」*taṣwīr-i gāw*とあり、本来ここに牛を描き込んで、牛の歩行を動力源とする水平回転の機構を図示するものであったと思われる。この回転を受けとる歯車の周縁が「大車輪の円周」*muḥīṭ-i ʿarḥ-i ʾazamat*と示され、その周縁の歯が縞模様で表されていることが分かる。*Habib*の推測によれば、この歯とかみ合って、おそらくかさ歯車のごとく、回転を垂直に変換するのが8輪の歯車であり、それらの歯は着色された三角形で表されている。さらに8輪の歯車の車軸として両側に突き出たドリルが、黒色で図示され「銃」*bundūq*と注記された都合16本の部材に穿孔を施す機構を説明したものだという。内側に「銃の台」*qāyimah-i bundūq*、外側にも同じく「銃の台」*qāyimah-i kamān*

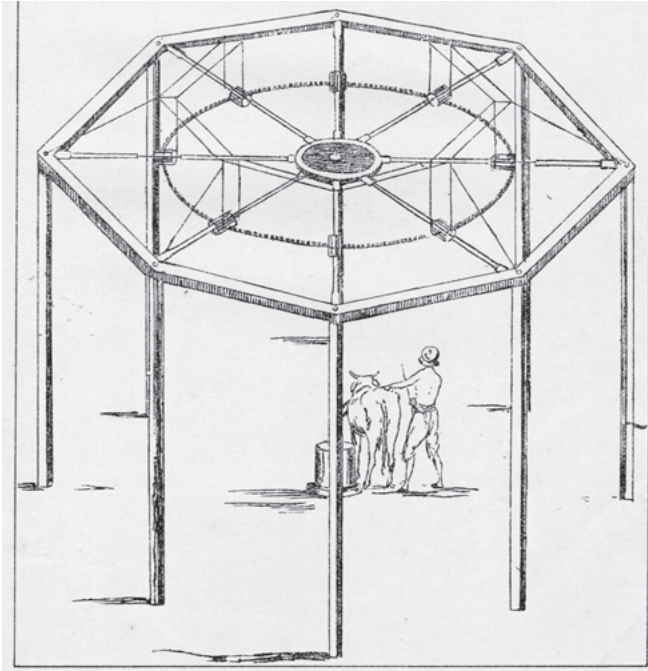


図4 「回転機」の想像図 [AA (Etr.) : I, pl. XV]

銃の等級

御用の作業所で製作されるもの、購入されるもの、献上されるものがある。それぞれが長銃と短銃、さらに無地、色付き、金属象嵌付き (küft-kār¹¹⁴) 【に分

と注記があり、Habibはいずれをも、銃身となる部材を固定するパーツと見る。その当否は定かでないが、ドリルを部材に貫入させる推力の機構はいずれにせよ不明である [Habib 1997: 141]。なおデリー石版本 (1855年) 原載の図をもとにした、英語訳初版第1巻 (1873年完成) の図版 (pl. XV) は英語訳第2版第1巻にも転載されており、これを図4として示すが、もちろんこれは想像図に過ぎない [AA (Etr.) : I, pl. XV]。(M)
¹¹⁴ Blochmannはhammeredとしているが [AA (Etr.): I, 122]、Haiderは、koftgariという技術について、金や銀を象嵌 (inlay) する技術であり、剣や盾などの装飾に用いられ、ダマスクス発祥と言われていたとしている。本訳注は後者に従う。この技術を持つ職人はkoftgarと呼ばれたという [Haider 1991: 151]。Victoria and Albert Museum所

けられる】。世界の主人たるお方は、数千挺の中から、105挺を御用のものとされた。12挺は各月に割り当てられており、11ヶ月後に1挺の順番が来るのである。30挺が各週の割り当てで、7日後には1挺が持ち出され次の1挺がもたらされる。32挺は太陽暦の各日の割り当てで、毎日1挺である¹¹⁵。31挺はクータルであるが、時には28挺となることもある。先のが消費される度に、そこから減った分を埋め合わせるのである¹¹⁶。先と後の順番は以下の通りである。月、週、日、クータル、無地、色付き、下僕に託されていない金属象嵌付き、下僕に預けられている金属象嵌付き、献上されるか購入されるかしたもののなかから選ばれた長銃、<I, 127> 献上されるか購入されるかしたもののなかから選ばれたダマーナク、この2種類【献上されるか購入されるかしたもの】からさらに選ばれたもの。

全ての御用のものは7グループに分けられ、15挺ずつが輪番 (kişik¹¹⁷) となり、下僕が準備している。日曜日には、最初のグループから2挺、2番目から4挺、3番目から5挺、4番目から4挺。月曜日、火曜日、水曜日は同じ方式である。木曜日には最初と2番目からは【これまでの曜日と】同じ数、3番目からは4挺、4番目からは5挺。金曜日には最初のグループから1挺、2番目からは5挺、3番目からは4挺、4番目からは5挺。土曜日はこの規則に則る¹¹⁸。常に、消費さ

蔵の銃の中で kufkari を施されたとされているものは、銃身に金の縁取りや模様が見られる (Acc. No. 2645 (IS) , Acc. No. 2621 (IS) , Acc. No. 3264 (IS))。 (N)

115 月の割り当てが12の倍数であり、週の割り当てが30、日の割り当てが32という数は、武器庫の規則で既出の弓の割り当ての数と同様である [AA: I, 118]。AA には、イラーヒ一暦の一ヶ月の日数は29日から32日の間であるという記述が見える [AA: I, 278]。 (N)

116 銃の数や種別から、ここまでの内容は次段落の105挺の輪番の話と、これ以降の内容はこの節の最終段落の101挺運用の話と対応していると推察される。ただ、これら2つの輪番、運用の関係は不明である。 (N)

117 本書では、宮廷の衛士の輪番制についての記事が「ケシク (kişik) の規則」として後出する [AA: I, 192]。曜日ごとに7つの衛士隊が編成されているところは、本文の銃の運用と同じである。この制度が1575年に導入されたことについてはANに記事がある [AN: III, 146-147]。 (M)

118 ここで述べられている数を表にすると以下ようになる。1番目から4番目のグループから各曜日に用意される銃の合計数は、先に述べられている月、週、日、クータルの割り当て数と同様である。 (N)

れる御用のものを補充するために次の段階のものが5揃い用意してある。クータルの半分が14挺、クータルのパーオ ($\frac{1}{4}$) が7挺、クータルの半パー (すなわち $\frac{1}{8}$) が4挺、クータルの6ターンク¹¹⁹ ($\frac{1}{8}$ の半分) が2挺、クータルの3ターンク ($\frac{1}{8}$ の $\frac{1}{4}$) が1挺である。クータルから消費されるたびに、半クータルがもたらされる。同様に、1揃いが次の揃いの後に配置され、最後のものは購入されたもののなかから選ばれたもので補充される。

このような方式で、常に101挺の銃が王朝の後宮に保管されている。イラーヒー月の初日に、月、週、日、クータル、無地、色つき、下僕に委ねられていない金属象嵌付きの銃、下僕たちの金属象嵌付き、【献上されるか購入されるかしたもののなかから】選ばれた長銃、選ばれたダマーナク、選ばれたもののなかの選ばれたもの各1挺ずつ、11挺の銃が幸運なる寝所の御前受け入れとなる。次の日には、月の銃以外が同様の順番で委ねられる。10日間、このような数で【銃が】かの親密なる区域【寝所】に送られる。世界の王が発砲され、1回ずつこの幸運に至らせると、再び最初【の銃】に戻る。それぞれを4回撃つと、表に送り、順番に則りそれぞれのグループで交換される。月の最初になったら、最初に置かれていた前月の銃¹²⁰が全ての後に置かれ、当月の銃が最初のものとなる。

銃やその他のもので御みずから仕留められた獲物を書記たちが数え上げると

	1番目	2番目	3番目	4番目	合計
日曜日	2	4	5	4	15
月曜日	2	4	5	4	15
火曜日	2	4	5	4	15
水曜日	2	4	5	4	15
木曜日	2	4	4	5	15
金曜日	1	5	4	5	15
土曜日	1	5	4	5	15
合計	12	30	32	31	

119 ターンクは重さの単位としては既出だが、このような分割の単位としての用例は、これまで本文中では見られない [AA (Jtr.) (1) : 91 n. 30]。 (N)

120 bundūq-i mäh-i raftah kih sar būd. Blochmannはこの部分を「使われていないものがあれば」(left unused)と解釈している [AA (Etr.) : I, 123]。 (N)

いう規則がある。例えば、御用のものの筆頭であるサングラム (*Saṅgrām*¹²¹) という銃によって、イラーヒー暦のファルヴァルディーン月だけでも、1019頭の生き物を狩られてきた¹²²。

銃兵 (*bundūqčī*) の月給の規則

賢明なる君主は、十人頭 (*mir-dahah*¹²³) の手当を、300ダーム、280、270、260の4段階にされた。その他の者たちには5段階あり、さらにそれぞれが3つに分かれる。第1段階の1番目は250ダーム、第1段階の2番目は240、第1段階の3番目は230。第2段階の1番目は220、中間は210、最低は200。第3段階の1番目は190、2番目は180、3番目は170。第4段階の1番目は160、真ん中は150、最低は140。第5段階の1番目は130、中間は120、最低は110。

121 ANには、Akbarが御用の銃である *Saṅgrām* を1568年の *Čitor* 攻略の最中に用いたという記録が見られる。この様子を描いた *Akbar Nāmah* 写本の挿絵が複数現存している。Chester Beatty Library所蔵のものでは、画面向かって右上の塔の上に立つ Akbar は茶色の銃を手にはしている (Object No. In 03.133)。一方、Victoria and Albert Museum所蔵のものでは、Akbarの立ち位置は同様だが銃の色は灰色 (銀色?) である (Acc. No. IS.2:68-1896)。また、*Ġahāngīr* は Akbar の優れた射撃の腕前に触れ、*Saṅgrām* で3000から4000頭の生き物を狩ったとしている [AN: II, 320; JN (T): 27]。なお、*saṅgrām* はサンスクリット語由来の単語で、ヒンディー語で戦いを意味する。この語は男性名としても用いられ、*Rānā Saṅgā* の別名は *Saṅgrām Singh* である [Gandhi 1989: 363; Fussman EI3: Chanderi]。(N)

122 注121で触れた、Akbarが *Saṅgrām* で狩った獲物の数と合わせて考えると、この数は1挺の銃による1ヶ月間の狩猟数ではなく、即位後、あるいは記録が取られ始めてからのファルヴァルディーン月に狩られた獲物の数の累計という可能性が高い。(N)

123 *mir-dahah* は10人の銃兵を率いる指揮官を指す。17世紀の記録では、さらに上の階級として100人頭 (*ṣadiwāl*)、1000人頭 (*hazāri*) が見られるという。Khanは、この給与表を、ムガル帝国の銃兵がマンサブダールの部隊に配属されていても宮廷から直接給与を受け取っていたことの証拠と考えている [Khan 2004: 146-148]。AAの中には厩や牛舎の働き手である *mir-dahah* も見られ、10人の部下を持ち、*aḥadi* のように給与を得て、厩の馬が死んだ際には罰金を取られると記されている [AA: I, 144, 145, 151]。Blochmannは *mir-dahah* を (マンサブに) 任官されていない階級 (*non-commissioned rank*) と表現している。なお、最も低いマンサブである10マンサブのマンサブダールは *dah-bāṣī* と呼ばれ、*mir-dahah* とは異なる [AA: (Etr.): I, 123]。(N)

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbari*. H. Blochmann (ed.), 2 vols., Calcutta, 1867-1877.
- AA (Etr.): do. H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.). (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
- AA (Etr.) Gladwin: do. Francis Gladwin (tr.), *Ayeen Akbery; or, The Institutes of the Emperor Akber*, 2 vols., London, 1800.
- AA (Jtr.) (1) : 真下裕之監修、二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (1)『紀要』(神戸大学文学部) 40, 2013, pp. 69-118.
- AA (Jtr.) (3) : 真下裕之監修、二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (3)『紀要』(神戸大学文学部) 42, 2015, pp. 113-151.
- AA (Jtr.) (4) : 真下裕之監修、二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (4)『紀要』(神戸大学文学部) 43, 2016, pp. 35-73.
- AA (Jtr.) (7) : 真下裕之監修、二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (7)『紀要』(神戸大学文学部) 46, pp. 27-61.
- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
- AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
- AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmāh*. Mawlawī Āgā Aḥmad 'Alī & Mawlawī 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-1886.
- AN (Etr.): do. H. Beveridge (tr.), 3 vols., Calcutta, 1902-1939.
- AN ms.: Ms. Add. 27247, British Library.
- Bernier: François Bernier, *Voyages de François Bernier docteur en médecine de la faculté de Montpellier*. F. Tinguely, A. Paschoud & Ch.-A. Chamay (éds.), *Un libertin dans l'Inde Moghole: Les voyages de François Bernier (1656-1669)*, Paris, 2008.
- Bernier (Jtr.) : do. 関美奈子・倉田信子訳『ムガル帝国誌』岩波書店、1993.
- BM: Sayyid 'Alī Ṭabāṭabā, *Burhān-i Ma'āṭir*. Sayyid Hāšimī (ed.), Ḥaydarābād, 1936.
- BN: Bābur, *Bābur Nāmāh*. (Ed.) 間野英二『パーブル・ナーマの研究 I』松香堂、1995.
- BN (Etr.): do. A. S. Beveridge, *The Bābur-nāma in English (Memoirs of Bābur)*, London, 1922.

- BN (Jtr.) : do. 間野英二訳『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂, 1998.
- BN (Thackston): do. W. M. Thackston, Jr. (ed. & tr.), *Zahiruddin Muhammad Babur Mirza, Bâburnâma*. 3 parts. [Cambridge, Mass.] , 1993.
- BNL: 'Abd al-Ḥamid Lāhawrī, *Bādšāh-Nāmah*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & 'Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1866-1868.
- BQ: Muḥammad Ḥusayn b. Ḥalaf Tabrizī. *Burhān-i Qāṭi'*. Muḥammad Mu'ini (ed.), 5 vols., Tihirān, 1341-1357 Sh.
- Castanheda: Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da Índia pelos Portugueses*. Nova edição. P. M. Laranjo Coelho (ed.), 9 vols. in 4 parts, Coimbra, 1924-1933.
- FJ: Ġamāl al-Dīn Ḥusayn b. Ḥasan Inġū Šīrāzī. *Farhang-i Ġahāngiri*. Raḥīm 'Afifi (ed.), 3 vols., Mašhad, 1972-1975.
- FR: 'Abd al-Rašīd Tattawī. *Farhang-i Rašīdī*. Mawlawī Dū al-Faqār 'Alī & Mawlawī 'Aziz al-Raḥmān (eds.), 2 vols., Calcutta, 1875.
- GI: Mullā Muḥammad Qāsim Hindū Šāh. *Gulšan-i Ibrāhimi*. 2 vols. Kānpūr, 1884.
- JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Ġahāngīr, *Ġahāngir Nāmah*. Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeeopore & Ally Gurh, 1863-1864.
- JN (T): do. Muḥammad Hāšim (ed.), Tihirān, 1359 Sh.
- MAI: Musta'idd Ḥān, *Ma'aṭir-i 'Ālamgiri*. Āġā Aḥmad 'Alī (ed.), Calcutta, 1870-1873.
- MI: Ānand Rām Muḥliṣ, *Mir'āt al-Iṣṭilāḥ*. C. Shekhar, H. Qiličḥāni & H. Yūsufdihī (eds.), 2 vols., Tihirān, 1395 Sh.
- MM: Sayyidi 'Alī Ra'īs, *Mir'āt al-Mamālik*. Aḥmad Ġawdat (ed.), Istanbul, 1313 AH.
- MS: Sikandar b. Muḥammad Maṅḡhū. *Mir'āt-i Sikandari*. Satish Chandra Misra & Muhammad Lutf al-Rahman (eds.), Baroda, 1961.
- MT: 'Abd al-Qādir Badā'unī, *Muntaḥab al-Tawārīḥ*. M. A. 'Alī & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta, 1864-1869.
- RGH: Ġiyāṭ al-Dīn 'Alī Yazdī, *Rūz-nāmah-i Ġazawāt-i Hindūstān*. L. Zimin & V. Barthold (eds.), Petrograd, 1915.
- SL: Mīrzā Mahdi Astarābādī, *Sanglāḥ*. Rawšan Ḥiyāwī (ed.), Tihirān, 1374 Sh.
- SN (Jtr.) : 森本一夫監訳、北海道大学ベルシア語史料研究会訳「ナーズィレ・フスラウ著『旅行記 (Safarnāmah)』 訳注 (IV)』『史朋』38, 2005, pp. 23-50.
- TA: Niẓām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (eds.), 3 vols., Calcutta, 1913-1941.
- TR: Mīrzā Ḥaydar Duġlāt, *Tārīḥ-i Rašīdī*. 'Abbās-Qulī Ġaffārī Fard (ed.), Tihirān, 1383 Sh.
- TSG: Sayyid Maḥmūd Buḡārī. *Tārīḥ-i Salāṭīn-i Guḡarāt*. A. A. Tirmizi (ed.), "Tarikh-i Salatin-i-Gujarat", *Medieval India Quarterly*, 5, 1963, pp. 33-72.

Varthema: *The Travels of Ludovico di Varthema in Egypt, Syria, Arabia Deserta and Arabia Felix, in Persia, India, and Ethiopia, A.D. 1503 to 1508.* J. W. Jones (tr.), G. P. Badger (ed.). London, 1863.

ZNSh: Nizām al-Dīn Šāmī, *Ẓafar Nāmah.* F. Tauer (ed.), 2 vols., Praha, 1937-1956.

ZNY: Šaraf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Ẓafar Nāmah.* A. Urunbayev (ed.), Tashkent, 1972.

二次文献（オンライン資料の最終閲覧日はいずれも2021年10月13日）

Alexander, D. G., Pyhrr, S. W. & Kwiatkowski, W. (2015) *Islamic Arms and Armor in the Metropolitan Museum of Art.* New York.

Alvi, M. A. & Rahman, A. (1968) *Fathullah Shirazi: A Sixteenth Century Indian Scientist.* New Delhi.

Anwarī, H. (1381 Sh.) *Farhang-i Buzurg Suḥan.* 8 vols., Tihriān.

Atil, E., Chase, W. T. & Jett, P. (1985) *Islamic Metalwork in the Freer Gallery of Art.* Washington, D. C.

Bacqué-Grammont, Jean-Louis. (2007/2008) Deux documents sur les canons de Seyyidī ‘Alī Re’īs laissés à Surate. *Eurasian Studies*, 6, pp. 97-108.

Boudot-Lamotte, A. (EI2) *Ḳaws, Encyclopaedia of Islam, Second Edition.* Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0471).

Clauson, G. (1972) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish.* Oxford.

Desai, K. (2002) *Jewels on the Crescent: Masterpieces of the Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya.* Mumbai.

Dihhdā, A. A. *Luḡāt-nāmah.* <https://www.parsi.wiki/>

Doerfer, G. (1963-1975) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen, unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit.* 4 vols., Wiesbaden.

Eaton, R. M. (2009) “Kiss My Foot,” Said the King: Firearms, Diplomacy, and the Battle for Raichur, 1520. *Modern Asian Studies*, 43(1), pp. 289-313.

Eaton, R. M. & Wagoner, P. B. (2014) Warfare on the Deccan Plateau, 1450-1600: A Military Revolution in Early Modern India? *Journal of World History*, 25(1), pp. 5-50.

Egerton of Tatton. (1896) *A Description of Indian and Oriental Armour. New Edition.* London.

Elgood, R. (1995) *Firearms of the Islamic World in the Tareq Rajab Museum, Kuwait.* London.

Fussman, G. (EI3) *Chanderi, Encyclopedia of Islam, Three.* Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_24391).

- Gandhi, M. (1989) *The Penguin Book of Hindu Names*. New Delhi.
- Gode, P. K. (1960) The History of Fireworks in India. *Studies in Indian Cultural History*, Vol. 2. pp. 10-56
- Gommans, J. (2002) *Mughal Warfare: Indian Frontiers and High Roads to Empire, 1500-1700*. London & New York.
- Goswamy, B. N. (1993) *Indian Costumes in the Collection of The Calico Museum of Textiles*. Ahmedabad.
- Habib, I. (1980) Changes in Technology in Medieval India. *Studies in History*, 2(1), pp. 15-39.
- Habib, I. (1997) Akbar and Technology. In: Habib, I. (ed.) *Akbar and His India*. New Delhi, pp. 129-148.
- Haider, S. Z. (1991) *Islamic Arms and Armour of Muslim India*. Lahore.
- Huart, Cl. & Massé, H. (E12) *Djams̄hid*, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*. (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_1978)
- Irvine, W. (1903) *The Army of the Indian Moghuls: Its Organization and Administration*. London.
- Khan, I. A. (1981) Early Use of Cannon and Muskets in India: A. D. 1442-1526. *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 24(2), pp. 146-164.
- Khan, I. A. (2004) *Gunpowder and Firearms: Warfare in Medieval India*. Oxford.
- Langlès, L. (1821), *Monuments anciens et modernes de l'Hindoustan*. Paris.
- Mahmud, S. J. (1988) *Metal Technology in Medieval India*. Delhi.
- Pant, G. N. (1980) *Indian Arms and Armour. Volume II (Swords and Daggers)*. Chandigarh.
- Pant, G. N. (1983) *Indian Arms and Armour. Volume III (Human Armour and Shield)*. Chandigarh.
- Pant, G. N. (1989) *Mughal Weapons in the Bābur-Nāmā*. Delhi.
- Pant, G. N. (1997) *Horse and Elephant Armour*. Delhi.
- Pavet de Courteille, A. (1890) *Dictionnaire Turk-Oriental*, Paris.
- Pellat, Ch. (E12) *Ibil*, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*. Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_3020)
- Platts, J. T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*. Oxford.
- Sohoni P. (2015) From Defended Settlements to Fortified Strongholds: Responses to Gunpowder in the Early Modern Deccan. *South Asian Studies*, 31(1), pp. 111-126.
- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London.
- Yule, H., Burnell, A. C. & Crooke, W. (1903) *Hobson-Jobson: A Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*. London.

Zenker, J. T. (1866-1876) *Türkisch-Arabisch-Persisches Handwörterbuch*. Leipzig.

古賀勝郎・高橋明 (2006) 『ヒンディー語 = 日本語辞典』 大修館書店.

中島楽章 (2013) 「1540年代の東アジア海域と西欧式火器: 朝鮮・双嶼・薩摩」 中島楽章編『南蛮・紅毛・唐人: 16・17世紀の東アジア海域』 思文閣出版, pp. 99-176.

真下裕之 (1995) 「一六世紀前半のグジャラートとポルトガル: 港市ディーウをめぐる諸関係」『東洋史研究』 53 (4), pp. 102-140.

真下裕之 (2012) 「ムガル帝国におけるバフシ職について: 大バフシ職の運用における人的要因」『東洋史研究』 71 (3), pp. 85-130.

画像資料の URL (最終閲覧日はいずれも 2021 年 10 月 13 日)

Chester Beatty Library

Object No.: In 03.133. verso (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_133/2/)

Object No.: In 03.163. recto (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_163/1/)

Object No.: In 03.187. verso (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_187/2/)

Object No.: In 03.202. verso (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_202/2/)

Object No.: In 03.203. recto (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_203/1/)

Object No.: In 03.227. recto (https://viewer.cbl.ie/viewer/image/In_03_227/1/)

Freer Gallery of Art

Accession Number: F1955.27a-b (<https://asia.si.edu/object/F1955.27a-b/>)

Metropolitan Museum of Art

Accession Number: 33.28.2 (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/32138>)

Accession Number: 36.25.2153: (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/30594>)

Accession Number: 2008.245 (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/35633>)

Victoria and Albert Museum

Accession Number: 571-1884 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O482054/shield-unknown/>)

Accession Number: 2621(IS) (<https://collections.vam.ac.uk/item/O471497/firearm-unknown/>)

Accession Number: 2645(IS) (<https://collections.vam.ac.uk/item/O471455/firearm-unknown/>)

Accession Number: 3264(IS) (<https://collections.vam.ac.uk/item/O471467/firearm-unknown/>)

Accession Number: IS.2:17-1896 (<http://collections.vam.ac.uk/item/O9304/akbar->

painting-basawan/)

Accession Number: IS.2:68-1896 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O9616/akbar-and-jaimal-painting-unknown/>)

Accession Number: IS.2:72-1896 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O9611/painting-miskina/>)

Accession Number: IS.2:73-1896 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O9610/akbar-and-rai-surjan-hada-painting-karan-khem/>)

Accession Number: IS.2:74-1896 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O9609/painting-miskina/>)

Accession Number: IS.2:84-1896 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O9594/akbar-painting-mahesh/>)

Accession Number: IM.249-1921 (<https://collections.vam.ac.uk/item/O187765/akbar-drawing-unknown/>)

Virginia Museum of Fine Arts

Object No. 90.119.1-4 (<https://www.vmfa.museum/piction/6027262-15624803/>)